
少年と剣

もじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と剣

【Nコード】

N2745L

【作者名】

もじ

【あらすじ】

美貌の凄腕医師・ラディスとその護衛リインの、その後の物語。少年は誰にも負けない剣術の才能を持つ。レーヌ国の女王陛下に見出され、更なる高みを目指す為に首都にやって来た。しかし彼はそこでも自らの居場所を見つけれないでいた。

びしりと相手の一撃が手首に命中し、ラインの右手から木製の剣がこぼれ落ちた。

ラインは痛み在眉を寄せ、赤茶の瞳でぎりりと相手を睨みつける。目の前に立つ黒髪の少年は息一つ乱れずラインに向かって真っ直ぐに木剣を突き付けている。目にかかる程に伸びた前髪が表情を消し、時折見える黒の瞳は光を反射して銀灰色に輝く。

もう何度となく同じ所を打たれており、ラインの手首はじんじんと痛み、血がそこに集中して熱を持っていた。

「……期待はずれだ」

「ま、まだまだッ！」

肩で息をしつつ足元に転がった木剣を拾い上げて、ラインはもう一度構え直した。ロガート族の少年は、しらけた顔で小さく呟く。

2

「こんなひよろひよろの女がイリアス族の英雄？　こんな弱い奴に護られてるのが伝説の男？」

「……期待はずれだ。何もかも」

燃えるような深い怒りを含んだ声だった。

世界で唯一の女帝が統治する、人心ともに豊かで慎まやかな財に富む独立国、レーヌ。

島国であるこの国の首都には全世界に信者を有する慈愛の女神リリーネ・シルラの聖地、白銀の大聖堂が鎮座している。それと対為

すように聳える、赤茶の壁面に重厚な歴史を刻む大学校。一流の英知を結集し一流の人材を輩出しゆく、全人民の学問の守り手たる学び舎は、レーヌ国女帝直結の公的機関である。

その女帝の膝元に控えているのがレーヌ国枢機議会の面々。

彼らはリリーネ・シルラの第一の使徒であるレーヌ国女王陛下の手足と動き、世界の医療の発展と平和の為に、命を奉ずる契約を交わした女帝腹心の部下達である。世界の人々が希求してやまぬ大学校の運営から政治経済、外交に至るまでに心を砕き、卓越した手腕を發揮している。その枢機議会に今回新たな部署が新設された。それはこの世界で絶大な権限を誇るこの国ならではのものだった。

レーヌ国の認可を受けて契約を交わし、医師や聖職者となったりリリーネ・シルラの使徒達の所在を調査し、安否の確認をする。そして使徒たる資格を持ち得る人物であるかどうかの追跡調査を行う専門の部署。女帝の命のままに全世界に散っている使徒達を搜索し、出会い選別し、時には医師や聖職者の免許をレーヌへ返還するといふ重要な任務が与えられている。それに伴い、この任に従事する者にも大きな権限が付与される。その為レーヌ国女王陛下よりじきじきに専任者が任命される事になっており、また詳細は目下議論中である。この部署の長は枢機議会議長でもあるテンペイジが兼任し、現在二名のみがその部署に配属になる事が確定していた。それがつい最近、レーヌ国に入国を果たしたルキリア国の医師ラデイス・ハイゼルとその護衛リインであった。

二人は既に任命式を終え、正式にレーヌ国女王陛下、シャウナルーズ・ルメンディアナの部下として枢機議会の一員に連なった。二人は今後 厳然たる弾劾者 として女帝の命を受け、世界を相手に果てなき闘争の旅路へと向かう事になるだろう。

ただ現在はレーヌの大学校に滞在しており、ラデイス自身の体調の回復を待っている状態にあった。彼は左目の視力の低下と右腕に受けた傷による後遺症により、万全の状態にはいまだに程遠い。こ

の国の女帝シャウナルーズがルキリア国へ書簡を出し、彼らをいち早く召集したのもラデイスの体調を慮つてのものだった。世界一を誇るレーヌの医療を持って彼の状態をより十全に完璧にする意図があったのだろう。

と、思っていたのだが……。

テンペイジは重厚な円卓の、美しい木目を眺めて大きく息を吐き出した。向かい側の席には自分と同じように少しばかり疲労を滲ませている青年が天井を見上げている。今日こなすべき全ての会議が、今やっと終了したところだ。日は既に朱に染まりつつある。

「シャウナは俺を殺す気らしいな」

青年の呟きを聞いてテンペイジは苦笑をこぼした。本当に、そうかも知れん。

「ラデイス殿、体調はいかがかな」

「大分良い。右腕の方もあともう少しだろう。なあテンペイジ、少しは休んだ方が良いぜ。この調子でこき使われていたら死ぬぞ」

「私はもう慣れたよ」

「あなたは女帝を甘やかしすぎだ」

笑いながら席を立つ。ラデイスはテンペイジと同じ、枢機議会の制服に身を包んでいる。首元までボタンのついた立襟の上衣に對のズボン。大学のそれは深緑だが、この制服は黒地に金の線が入ったものだ。長身の彼がそれを着ると、何の変哲もない制服もまるで礼服のように見えてしまう。その上左目の視力を補う為の片眼鏡をかけており、それが皮肉にも整った顔立ちに洗練された雰囲気と華を添えていた。品格と威厳の漂う、美麗な容姿。

「リインはどうしているかね？　あなたをこちらに張り付けにしてしまつて申し訳ないな」

「あいつはまた別の仕事を与えられてる」

「ほつ」

テンペイジは眼鏡を外し、深いしわが刻まれた目尻をこすつた。

「すぐ近くの剣術道場に行つてる」

「ベレンダイか」

「ああ。そこで師範達の手伝いをしている」

それだけを聞いて、自分の上司が意図している事に気付く。

この首都にある剣術道場ベレンダイは、伝説の剣豪と呼ばれたベレンダイが三十数年ほど前に開いた道場だ。歴史も古く一級の剣士を育てる事には定評がある。テンペイジ自身も師範として名を連ねており、次世代の青年の育成の為に剣を振るう事もあった。隣を歩くラデイスは、その剣豪ベレンダイに手ほどきを受けて剣術を学んだ。

今あそこには、シャウナ様がまたどこかで見出して来た人材がやって来たばかりだ。確かロジエルという、相当剣術に長けた少年だったな。

中庭から差し込む西日に色づいた廊下を歩く。

「明朝ラデイス殿には研究員達との会議が入つていたな。後ほど資料をまとめて渡しておく。書記官を向かわせよう。その後はまた、厳然たる弾劾者の会議だ。こちらもやつと何とか形づいてきたな……。あとは詰めめ段階だろう。頼りにしている」

彼は薄茶色の髪をがしがしと掻きつつ片手を上げて答え、去つてゆく。テンペイジはその背を無言で見つめた。あの存在感と彼の纏

う空気は、おいそれと出せるものではない。自分よりも遙か年下のその人物に対して、心から尊敬の念を抱いている。

ルキリア国で起こった事件の事は報告で聞いているが、それさえも彼はもしかしたら予測して動いていたのではないかと思っている。華奢で少女のような端麗な容姿をしていたあの少年は、勇ましく成長し、本当に当初の目的を達成してしまった。

ルキリア国は今後、種族の枠を飛び越えて多才な人材を国の中枢機関に置くようになるだろう。それに長年停滞していた医療の発展も期待できる。全ての土台を彼自身が作り上げ軌道に乗せた。尚且つ帝都ベイルナグルには自分も信を置くレーヌ族の才人、クレイとソアの二人がいるのだ。盤石である。

シャウナ様があれだけの期待をかけて薫陶した意味が、ここに来て痛切に身に染みて分かってきた。あのラデイス・ハイゼルという男を見出し、才能を開花させたこの国の女帝に、テンペイジはやはり絶大な信頼と尊敬を寄せるのであった。

ラデイスは来客用の部屋へ戻り、首元まである立襟のボタンを外して着崩した格好になって、深く息を吐き出した。頭痛がする。目を使いすぎた。眼鏡をテーブルへ置いて椅子に腰かけ、明日の案件を思索しているところへ、勢い良く部屋の扉が開いてリインが戻って来た。

「あ。帰ってたの」

剣を壁に立てかけて、こちらへ歩いてくるリインの姿を眺める。白い頬は少し紅潮しているが、それは激しい運動による為のものだ。歩幅、肩の揺れ。顔色、肌の張り。視線、口元、息使い。瞬時にあ

らゆる部位に視線を巡らせ相手の状態を無意識に診てしまつう。
これは職業病だろう。

ラデイスは席を立ち、瓶に入っている良く冷えた水をグラスへ注ぎ、テーブルへ置きながら口を開いた。

「荒れてるな」

「別に！」

リインはすとんと椅子に座り、グラスの水をごくごくと飲み干してゆく。

レーヌ国では女性でも剣術を習う事が普通だ。それにイリアス族に対しての差別や偏見も皆無といって良い。この首都には数名のイリアス族が暮らしている程だ。日頃男性として性別を装っているリインも、ここでは女性として過ごしている。が、普段とたいして変わらない。今はベレンダイの紺色の道着を身につけている。

リインの左手首には漆黒のビードラの腕輪が嵌まっていた。これはイリアス族の特殊な「力」を、安全に外へ逃がす為に特別な鉱石を配合して作ったものだ。現在は既に実用化の段階にまで来ているが、どれだけの耐性があるのかといった様々なデータを収集する為に、実験的に数日間リインが身につける事になった。

ラデイスはリインの傍に椅子を引き寄せて座り、その細い手首を手にとって話しかける。

「今日は『力』を何回発動させた？」

「……覚えてない」

「おい」

「だって！ そんなのいちいち数えてらんないよ」

小型の時計を眺め脈拍を計り、口を開かせ見分してゆく。ふと気付き、リインの袖口を捲って右手首を見る。青黒い痣が出来ていた。

触れると熱を持っている。

「ベレンダイの道場は腕自慢の奴らが集まるからな。なかなか面白いだろう」

何の気もないような言い方をしつつその細い二の腕を掴むと、リインはごく僅かに眉をひそめた。どうやら全身に打撲をこしらえているようだ。あの道場では木製の剣で鍛錬をする。

「すつごく強い奴がいるんだ」

「らしいな」

こいつをこれだけ痛めつける奴だ。余程の自信があるのだろう。リインに剣術の稽古をつけたのはクレイだ。元々腕力も強いリインは、今ならちよつとした剣士よりも腕が立つ。

「何て名前だ？」

「えっと、ロジエルって言ったかな。僕より四つも下なのに、強いんだ。悔しいけど剣じゃ負ける」

「そのようだ」

その上相当性格がひねくれている。おそらくは何度も手首を打って、剣を落とさせたに違いない。絡まれたな。

そこで、シャウナルーズの意図する事が読めた。どこまで働かせる気だ。

「……あいつめ」

深く息を吐き出して憎々しげに呟く。

「は？」

「いや。こっちの事だ」

リインの顎を掴んで顔を横向きにさせた。良く見ると細い首筋にも擦れたような傷があり、白く繊細な肌が赤く染まっている。

ラデイスは無表情を装い、ふつふつと湧き上がる怒りを抑え込んだ。

「なあ、もう良いだろ？ 食堂行こう。お腹すいたよ」

リインが屈託のない表情でこちらを見つめている。ラデイスは無言のままリインを椅子ごと引き寄せて華奢な背に腕を回し、首筋の傷に唇をつけ、舌で舐めた。びくりと身体を竦ませて、リインが両手でラデイスの肩をぐいと押す。

「ん……なん、だよ」

「擦り傷が出てる」

「だ、だからって舐めるなよ……あんた医者だろ」

耳の後ろあたりに唇を押しつけて、リインの柔らかかな身体を抱き締める。艶やかな栗色の髪が頬に触れた。

「ラ、ラデイス。ぼく、汗かいてるんだ……」

「ああ。そうだな……」

リインが服の裾をぎゅうと掴み、弱々しく抵抗してくる。抱き締めている腕に力を込め、ゆっくりと息を吸い込んだ。

自分の嗅覚は人よりも敏感に出来ているのは知っている。が、あまり役に立たないのだ。敏感な故に、すぐに麻痺してしまう。診察をする時や初めて行く場所に向かう時等にこの嗅覚を使う事はある

が、それでも補助的な役割にしかならない。ほとんどこれに頼る事はなかった。

人の体臭には一つとして同じものがない。他に強い匂いのない時は背後から近付いて来ただけで、相手が誰なのか分かる事もある。ラインの体臭は、他のどれよりもかぐわしく、自分を虜にするのだ。

この事は口が裂けても言えない。こんな事を言おうものなら、変態扱いされるだろう。ただでさえ以前にケダモノと罵られているのだ。

先程から扉の外に気配を感じていたが、ラデイスはそれを無視してラインの首筋に唇を這わせた。

「ん、ちょっと……ラデイ、ス……食堂、行こうよ」

ラインが身じろぎながら呟く。照れ隠しに言っているのか。それともそんなに腹が減っているのか。おそらくそのどちらもだろう。腕の中にいるラインをじっと見つめ、微笑む。

「ライン。俺はお前を食いたい」

顔を真っ赤にして固まったラインに口付けようと顔を寄せた時、扉を叩く音が響いた。

「し、失礼しますっ。ラデイス先生、資料をお持ちしました」

助かったとばかりに、ラインが腕の中から逃げていった。

「僕、先に行ってるから！」

入れ違いに黒髪の青年が資料を手に申し訳なさそうな顔で部屋に

入ってくる。ラデイスは席を立ち、礼を言っつてその資料を受け取り、ふと思いついたように聞いた。

「シモン。今ベレンダイにいるロジエルという少年を知ってるか？」
「えっ!？」

緑の瞳を丸くして、青年が驚いた表情でこちらを見上げる。背はラデイスより頭一つ分程低く、右目の下にほくろがある。細身の体軀でいかにも文学青年といった風貌。ラデイスと目が合うと少しだけ赤面した。

「あ! はい……。つい最近ここへやって来た少年ですね。グナーの村の出身だと聞いていますが」

「そうか。詳しい事が知りたい。頼めるか？」

「分かりました」

ラデイスはシモンと会話を交わしながら部屋を後にした。

001 (後書き)

はじめまして。お久しぶりです。もじといたします。

この物語は「紅い月 青の太陽」の続編になっております。

こちらだけでは多少、分かりづらい点もあるかと思いますが、物語の大筋には問題ありません。(おそらく)

少しの間ですが、お付き合いいただけたら嬉しいです。

練習試合を済ませ、リインは汗を拭って周囲を見渡した。

大学の広大な敷地内の一角に併設されているベレンダイの道場は、四方の壁が取り払われた開放的な空間で、今はその広い道場に十数名の精鋭達が鍛錬に励んでいた。女性や男性、年齢もまちまちだが皆鍛え上げられた体躯をしている。剣術を教える師範は三名いて、眼光鋭く剣士達の指導に当たる。

「リイン。どうかしたかね」

師範の一人がきよろきよろと落ち着かないリインの様子に気付いて、声をかけた。立派な口髭を生やし、紺色の道着に身を包んだ壮年。前合わせで腰の紐で止めるボタンのない上衣に、対のズボン。足元は裸足だ。この道場では基本的に、全員が同じ道着に身を包み裸足という格好である。

じろりと睨まれてリインは肩をすくめた。

「ロジエルは？ また来てませんか」

「……今日はまだ顔を見ておらん」

髭の師範はため息を吐き腕を組む。少し憮然とした表情。

「あいつはどうも、気分にもうがあっていかな」

「僕、見てきます」

リインは道場を出て、裸足のまま芝の上を歩いて左右を見渡した。道場の周りは広大な芝生の庭が広がり、そこでも剣術の稽古が出来るようになってる。もう昼前だ。顔を出さないつもりだろうか。

大きな木の根元に目当ての人物を見つけ大声を上げた。

「ロジエル！」

シルエットの少年がこちらを振り返る。リインはずんずんと相手に近づいて、手に持っていた練習用の木剣を投げた。少年はそれを片手で受け止めて見上げるようにリインを睨みつける。

「手合わせしよう」

ロジエルはむっとした口元を作り、面倒臭そうに立ち上がった。

「……何度やっても同じだと思うけど」

「今日は勝つ！」

言い放って自分の木剣を相手に突きつける。リインと同じ背丈、黒髪で細身の少年はブラウスにズボンという普段着。前髪がやや長すぎるようで、目元は陰になっていて表情が良く見えない。

「また勝手に道場以外で手合わせしてたら怒られるんじゃないの」「どうせ怒られるのは僕だから良いだろ」

しびしびという風で、少年はリインと対峙する。表情に乏しく暗い雰囲気。けれど僅かに見え隠れするのは、やはり怒りや苛立ちといった感情。

リインは当初からロジエルの心の底にある負の感情を感じ取っていた。少年は無口で、いつもつまらなそうな表情をしている。黒髪の間から見える目つきは懐疑的で、態度は斜に構える。要は、ひねくれているのだ。彼が何に対してそれ程イラついているのかは分からないし、リインにとってそれは二次の問題だった。

ロジエルとこのベレンダイの道場で初めて顔を合わせた時に、少年は初対面のリインに絡んできて、勝負を申し出たのだ。周囲の人々から後で聞いたが、彼がこのように感情を表に出したのはその時が初めてだったらしい。

彼は鬼のように強かった。まだ十四という年齢を考えると、未恐ろしい程だ。リインはこてんぱんにやられてしまった。負けたのは悔しかったが、それだけならまだ良かった。その後少年が呟いた言葉が問題だった。それはあたかも独り言のようで、しかし明らかにリインを意識して呟かれた言葉だった。

「なんだ。イリアス族って聞いて面白そうだと思ったけど、全然弱いじゃないか。こんな奴を護衛にしてるラデイスとかいう奴だって、たかが知れてる。みんなが騒ぐからどんなもんかと思ったけど、大した事なさそうだ」

リインは日中ビーダの腕輪をしている為に、『力』を発動させても腕輪のお陰で無効化される。

その呟きを聞いて瞳が深紅に燃え上がったのは言うまでもなく、もし腕輪をしていなかったら相手を吹っ飛ばしていた事だろう。

ロジエル少年はグナーという村からやって来た。レーヌ国の南東のはずれに位置するその村には、母国から亡命してきたロガート族が集落を構えている。ロガート国は軍事国家であり、規制や統制が厳しく民衆も常に監視されていると聞いた事がある。その為全ての権利を放棄して移民としてロガート国を離れ、命がけで他国へと亡命する国民も多くいるのだ。ロジエルもそういった移民の一人だ。母と二人きり、ひっそりとグナーの村で生活していたところを女帝に見出され、この剣術道場に親子でやって来た。今はこの近くに家を用意してもらって暮らしていると聞いた。特待生である。母は大

学校の職員として雇われ、食堂で働いているという。

きつとたくさんの辛い経験をしてきたのであろう。彼の瞳が暗い影を落としているのはその為だ。

彼は独学で剣術を身につけたという。確かに基本は滅茶苦茶だ。

しかし天性の才能なのだろう、誰も彼には勝てなかった。ベレンダの剣術道場と言えば、国内外から腕に自信のある者達が勇んで集い来たる場所である。驚いた事にその誰もが、一度もまともな剣術の稽古を受けていない十四歳の少年に、勝てなかったというのだ。

ロジエルはそれから全てに興味を失ったようになり、稽古にも顔を出したり出さなかつたりする日々を送っていた。最近では道場に通う剣士達から疎まれはじめているようだ。指導に当たる師範でさえ、強すぎる彼をどうしたら良いものかと手に余して思い悩んでいる。

彼は誰にも心を開かない。

「つてえ！ このつ。同じところばっかり打ち込むなよっ」

リインはぜいぜいと肩で息をしつつ、大声を上げた。

「……あんたが弱すぎるから」

「そんなに強いなら加減くらい出来るだろ！」

「習ってないから知らない」

ここ数日、ロジエルはリインに対しては何かと口数が多くなってきた。

「ここにいたのか」

その声にはつとして振り返ると、枢機議会の制服姿で片手に資料

を持ったラデイスが歩いてくるのが見えた。隣に同じ制服を着たレ
ーヌ族の青年を連れている。

「ラデイス。……何で」

リインは少しばつの悪い心地で彼を見上げた。やられてるところ
を見られただろうか。情けない。

「噂の剣士殿を拝見しにな」

彼は上手に口角を持ち上げて笑顔を作った。相変わらずの神々し
いまでの綺麗な微笑み。今日は左目に黒い眼帯をしており、薄茶色
の髪は伸びて、以前のぼさついたスタイルに戻っている。

ロジエルは足元に木剣を投げ捨て、無言で背を向けて歩き出した。

「随分と自分の腕に自信があるようだな」

ラデイスがその小さな背に声をかけるが、少年は立ち止まらずに
遠ざかってゆく。

「何の指南も受けずに独学でここまで仕上げるなんてな。さすが、
ロガートンの血だ」

ぴたりと少年の足が止まる。

ロジエルはこちらに背を向けたまま、ぼそりと呟いた。

「……みんなが天才だとか伝説だとか言うからどんな奴かと思った
ら、ただのおっさんじゃないか」

おっさん!?!?

むっとしてリインが口を開こうとするが、ラデイスはそれを手で制した。

「そりゃあお前から見たらおっさんだろうよ。なあ少年。リインに稽古をつけてくれていたのか？ 意外と面倒見が良いな」

「そんな弱い奴、相手にならない」

「そうか」

「こんなに弱くて、しかも女を護衛にしている奴なんか、最低だ」
「そうか？ だが俺は、お前には負けないよ」

ロジエルが振り返った。口元がひきつったように笑っている。

「右腕が使えなくて、片目で、それで俺に勝てるって？ 何の冗談だよ、おっさん」

黒髪の間から見える瞳に、強い光が宿った。対するラデイスは飄々とした態度で続ける。

「これくらいのハンディは必要だろう？」

少年は踵を返して戻り、足元にあった木剣を取り上げる。

「あんたが恥をかくだけだ。その道場の師範の奴らみたいに、黙ってりゃ良かったんだ」

ラデイスは持っていた資料を隣の青年に手渡し、リインから木剣を取り上げて笑った。

「なかなかのふてぶてしさだな。シモン。リインを連れて少し離れていってくれ」

ラインが口を挟む前に、始まってしまった。

空間が歪んでしまったかのような、重みを伴う殺気。あまりの鋭さに身動きがとれなくなる。一瞬にしてラデイスの表情が怜悯なものに変わっていた。研ぎ澄まされた眼光の先にいる少年は僅かに顔を強張らせる。ラインは何か足を動かして、シモンのいる場所まで下がった。

両手に木剣を構えたロジエルが、素早い動作で斬り込んでゆく。ラデイスはその最初の一撃をぎりぎりのところでかわし、左手に持つ木剣で少年の攻撃をいなした。間髪入れずにロジエルは身体を反転させ、それと同時に攻撃を繰り出す。あまりの速さにラデイスの上体が僅かにぶれる。がつん、とお互いの剣先が激しくぶつかって弾けた。ロジエルが身軽に飛び退いて、すぐさま下方からラデイスを狙う。

二人の動きはかなり速く、そして無駄がない。ロジエルは少しばかり大きな振りをするが、それも機敏な動作によって何の支障もなかった。お互いが一歩も引かずに打ち合っている。互角だ。

ラインの背筋にひやりと汗が伝った。

ラデイスの利き腕は左だが、剣を習得したのは右腕だ。本来であれば右で剣を扱うのだが、以前に受けた傷のせいで前のようには動かない。日常生活では問題はないのだが、剣術となると話は別だ。素早い動作と重い衝撃に、ラデイスの右腕はもう耐えられない。だから今も左腕でロジエルと戦っている。それに左目には眼帯をしたままで。

万全の状態でないにしろ、ロジエルの強さは半端ではない。あのラデイスが全力で、小さな少年に向かっているのだ。

ラデイスがじりりと後退したと感じた次の瞬間に、ロジエルの木剣がラデイスのそれとぶつかる。少年は素早く手首を返して一撃を叩きこんだ。その衝撃にラデイスの手から木剣が弾けてこぼれる。

一瞬の事だった。

「っ……強い」

隣に立つシモンが愕然として呟く。リインは目の前の光景を信じられないような気持ちで凝視していた。ぐっと胸がつまる。動悸がする。無意識に両手を固く握り締めていた。ラデイスが、負けた…。

「なるほど。これは師範の手にも負えんはずだ」

ロジエルもラデイスも、肩で息をしながら睨み合っている。

「これで分かったか、おっさん。あんたはもう終わった人間なんだ」

「俺は往生際が悪いんでね。もう少しあがいてやる」

ラデイスがゆっくりと長身を折り曲げて木剣を拾い上げた。その姿を見て、リインは嫌な予感がして口の中で小さく呟く。

「ラデイス、よせよ……」

彼は右手で剣を持っている。ロジエルは僅かに口を開け、ラデイスを見上げた。

「右は使えないはずじゃ……」

「さあな。試してみよう」

ざざ、と風が吹き、しんと辺りが静まる。張りつめた緊張が一帯を覆い、戦う二人の気迫がそれに合わさって、リインもシモンも身動き一つ出来ないでいた。

ラデイスが右手で木剣を構え、僅かに顔を俯かせた。彼の息使いがここまで聞こえてくる。独特の呼吸音だ。これは、極限にまで集中力を高める時に使用する呼吸法。リインは口元をぎゅっと結び、ラデイスの横顔を見つめる。

駄目だよ。右腕は……。負担がかかりすぎる。

「来い」

ラデイスの低い声が響き、ロジエルが敏捷な動作で斬り込んでいった。

木剣を右手に持ち替えたラデイスの強さは圧倒的だった。あらゆる力を凌駕する、殺気と熱。今まで互角に戦っていたロジエルだが、彼の強さに振り回され、立っているのもやっとのようにはらふらふらになっっていた。

ロジエルはよろめいて木剣を取り落とした。あえぐように肩で息をしている少年は汗だけで、打たれた腕に手を当てながら、ラデイスを見上げるように睨みつけている。

「拾え」

ラデイスは何の感情も表れない声で告げた。青い瞳は鋭くロジエルを射抜き、彫像のように整った美しい顔から残酷な冷たさが漂う。もう既に、何度となく彼はこの言葉を少年に突き付けていた。相手は子供だというのに全く容赦がなく、相手をとことんまで追い詰めてゆく。

いつの間にか二人の周りには遠巻きに人が集まっており、固唾を飲んでこの場を見守っていた。誰も口を挟めない。ラデイスの気配がそうさせている。小さな少年は体力も気力も限界をとうに超えている。ロジエルがぎりりと歯を食いしばり、木剣を力任せに振り上げた。

「うっつ……ああッ！」

ラデイスの剣先がぶれる事なくロジエルの中心を捉え、彼の木剣を弾き飛ばした。少年は衝撃に耐え切れず、膝から崩れ落ちるようにして地面に伏した。

「強いな。お前は」

大きく息をついてラデイスが感慨深げに呟く。

「だが、まだまだ青い。基本も全くのでたらめだ。そのまま続けていたら身体を壊すぞ」

ロジエルは荒く息をついて少し咳き込んだ。

「護衛なんて、いらぬじゃないか……」

本人がこれ程強いのに何故リインを護衛として置いているのか、と言いたかったようだった。リインは無言で目の前の二人を見守る。ラデイスはうつすらと笑みを浮かべた。

「それは違う。リインはお前より強い。今のお前では太刀打ち出来ないだろう」

ぎゅっと胸がつかえた。そんな事言わなくて良いのに……。僕はロジエルに一度も勝ててない。

「ロジエル。お前はここに何しに来た？ 何の為にここにいる」

四つん這いで俯いたままのロジエルに、ラデイスは言葉をかける。少年の身体はこうして見るととても小さく、華奢だ。無言の時が流れる。大きなため息をついて、ラデイスがまた口を開いた。

「お前には口がないのか」

「……あんたに言う必要ない」

「答えられないのか」

「別に来たくて来たわけじゃない。この道場にだって、別に……」
「何故剣を学んだ？」

「なんであなたに言わなきゃいけないんだっ！」

「何を守りたくて、剣を学んだ？」

「そんなの、知るかよっ」

「何の為に剣を持つのかを違えたら、無意味だ。お前の成長はそこで止まる」

「きっ、決めつけるな！ 偉そうにつ！ あなたはどうなんだよ！
あなたは何の為に剣を持ってんだよ！！」

あのロジエルが、感情をあらわにしてラデイスに向かって怒鳴っている。噛みつくような勢いで彼に食ってかかっていた。ふらふらになるまで徹底的にやられ、追いうちをかけるように詰問されているのだから、怒って当然と言えるかも知れない。

ラデイスは少年の問いに、悠然と答えた。

「世界を救う為だ」

ロジエルは一瞬呆気にとられ、またぎりぎりと言を食いしぼる。

「……んだよそれっ」

「おいおい。俺は本気で言ってるんだがな。それでお前はどうかんだ？」

「うるさいッ！！」

ロジエルは怒鳴ってラデイスの言葉を遮り、転びそうになりながら身体を起こして駈け出した。

「ロジエルっ」

ラインが小さくなってゆく背中に声をかけるが、ロジエルの姿はすぐに見えなくなった。その場にいた人々も少年が走り去った先を見つめる。

「ラ、ラデイス先生……すみません。あの、早くしないと会議に間に合いません」

シモンが申し訳なさそうに小さな声で言った。ラデイスは、ああ、と返事をして大股でこちらに歩いてくる。

「ラデイス！ 大丈夫なのかよ」

木剣を受け取りながら見上げると、ラデイスは肩で息をして額には汗を浮かべていた。彼は右目を細め、ラインの小さな頭にぽんと手を置いた。

「右腕はもって十五分程度、ってところだな」

そのままシモンを連れて大学校へと戻ってゆく。ラインは無言でその長身の後ろ姿を見送った。見送る事しか出来なかった。胸にじわじわと悔しさが込み上げる。

これで分かったか、おっさん。あんたはもう終わった人間なんだ。

ロジエルの言葉が胸に刺さって痛かった。確かにラデイスは、以前に比べたら弱いのかもしれない。やっぱり、あの時の傷のせいだ。だけどそれだって自分以外の人達を護る為に、背負った傷なのに。あの傷こそが本当の強さの証明なのに……。

この豊かなレーヌの大学校に集う人々の中にも、ラデイスを唾う

者がいるのを知っている。彼はどこに行ってもたくさんの人に愛され、そして憎まれる。

ラデイスは医師としても剣士としても、他に追隨を許さない程の一流の腕を持つ。しかし、その人々の中ではそれはもはや過去形だった。右腕と左目が不自由になった彼を、使いものにならない半端ものだと嗤った奴がいたのだ。確かに怪我を負う前の状態から見ればそう言えるのかもしれない。だけど。

ラデイスは、今だって強い。

心は以前と変わらずに強くて、自然と周囲の人々が彼に頼る。その絶対的な存在感に皆が安心する。彼は自分が為して来た事をぺらぺらと口にしたりしない。淡々と、ただ自らの為すべき事をこなし、てゆくだけだ。他人からの陰口も噂話も、どこ吹く風でちっとも気にしない。

それに今だって剣の腕も師範クラスだ。ついさっきのロジエルとの手合わせを見て再確認した。医者としての技術だって、診察眼は以前と変わらないし薬品の調合の腕だってびかーだ。ただ、難しい手術の執刀が出来なくなっただけだ。

だから悔しくて仕方ない。あんな風に言われて、黙っているわけにはいかない。ラデイスは気にしないだろうけど、僕はいやだ。

なのに、僕は弱い。

「いい気味だったな。せいせいしたよ」

「ああ。あの生意気なガキがあそこまでやられるなんてなあ」

「噂に違わず、ラデイスさんはお強いのだな。まるで格が違う」

「間近に見られて光栄だ。あの剣さばきは本当に素晴らしかった」

勝負を見守っていた人々のほとんどが、道場で剣術の稽古をしている剣士達だった。

「生前のベレンダイに師事したと聞いたぞ」

「あの剣豪に！？ それはすごいな」

「でもなあ、少し大人げなくなかったか？ あんな子供に本気だなんて」

「うーん。確かに……」

「よっぽど腹を立てたんじゃないか？」

「違う。」

「あのガキ、剣の腕は確かに凄いが、人を見下しやがるから。口のきき方だつてなつてない」

「そりゃあラデイスさんだつて怒るだろう」

「違う。そんなんじゃない。」

口々に会話を交わし見物人達は散っていった。広い芝生の上にはインナー人がぼつんと立ち尽くす。

どうしてラデイスが、あんな役をしなくちゃいけなかったんだ。僕が、もっと強かったら……。

リインは俯いて鼻をすすり、腕でぐいと顔を拭った。

「ラデイス先生、大丈夫ですか」

大股で大学校の長い廊下を足早に歩く。これから 厳然たる弾劾者の会議があり、それにはシャウナルーズ様もご出席されるとあって、シモンは内心とても慌てていた。そんな大事な会議に遅れる

なんて大変な事だ。

「ああ。欲を言えば冷えた水を一杯飲みたいが、そんな暇はなさそうだ」

隣を歩く長身の彼をちらりと見上げる。涼やかな鼻梁から顎にかけての美しい曲線。

鬼才と言われたレーヌ族名家の子息、クレイ・フォルクードが主と定め、女王陛下やテンペイジ議長からも絶大な信を寄せられる人物、ラデイス・ハイゼル。この大学校で知らぬ者はいない程の有名な人だ。今現在クレイ・フォルクードはルキリア国の診療所で医師をしていると聞いた。その両親であるフォルクード夫妻は枢機議会の一員として女帝を支えている。

ルキリア族である彼の瞳は、真つ青な海のように、その奥が金色に輝くとても珍しい瞳の色をしていた。ルキリア族の中でも正統な血筋の皇族のみが持ち得る事の出来る瞳。彼は 黄金の青い目を持つルキリア皇族だった。永い歴史の中で世界一の領土を誇り、絶対的な権力を独占し続ける種族。

偉大で高貴、不遜なるルキリア族。

レーヌ国は独立国家だが、ルキリア国に連なる国土には変わりない。世界一の知性と医療、薬学を誇り、絶大な権限を持つレーヌでさえもルキリア族の支配下に置かれているのだった。

ラデイスはルキリア皇族の血筋ではあつたが、その位を持たないどころか、生まれてすぐに当時ルキリア国に実際に存在していた強制労働施設へ連れ去られたと聞いた。そこでイリアス族によって育てられたのだ。数奇な運命を生きる、力ある青年。

実際にラデイスと接してみて、意外にも気さくで朗らかな人物だったので驚いた。三年間大学の役員として従事し、つい最近枢機議会の一員に任命されたシモンにとって、毎日が緊張の連続である

のだが、何故だか彼とは普通に言葉を交わせるので不思議である。

「あの、先生。何故手加減をしなかったのですか？」

先程の手合わせは圧倒的だった。いくら強いとはいえ、向こうは少年だ。それこそ大人と子供程の力の差があった。そんな相手に手加減せずに全魂を込めて打ち合っていた。

「真剣な人間と向き合う時にはこちらにもそれなりの覚悟がいる。中途半端な事をするとな怪我をするんだよ。お互いにな。それにその怪我が致命的になる事がある。子供だろうが何だろうが、俺は人間を相手にしてる」

彼の答えにシモンは曖昧に頷いた。怪我をするって……。あの少年は身体中に擦り傷と打撲を作っただろうから、もう怪我をしているんじゃないだろうか。それに、覚悟とは。それは一体どういうものなのだろうか。

目の前にやっと会議室の扉が見えて来た。良かった。間に合いそうだ。扉の前で身なりを整え、呼吸を落ち着かせる。それからラゲイスに資料を手渡し、シモンは遠慮がちにまた口を開いた。

「あの、それと……」

「何だ」

「ど、どうして私の名前を知っていたのですか」

ひとくちに枢機議会といっても、様々な分野に分かれて大勢の役員達が働いている。大学の運営に関する仕事に従事する者と医療関連に配属した者は、大学の制服と同じ深緑のそれだが、右胸に国家の紋章が描かれているものを身につける。研究員達はその上から丈の長い上着を着用するのが常だ。そして政治や国家運営に関わ

る分野で働く者達がこの黒の制服に身を包んでいる。役員同士でも名を知らぬ事の方が当然だと言って良い。

それにシモンには、少し特殊な事情があった。

長身の彼は意外そうな顔でシモンを見下ろし、眉を上げて答えた。

「共に仕事をする仲間だ。知らなくてどうする。当然の事だろう」

そう言って扉を開け先に部屋に入ってゆく。黒髪の青年は刹那、呆然とその背を見つめ、慌ててそれに続いた。

「シャウナ。俺はガキのおもりは御免だぞ」

「ん？ 何の事だ」

艶然と微笑む女王陛下。ラデイスは腕を組んで大きく息を吐き出した。

目の前の円卓の上には豪華ではないが色とりどりの料理が並んでおり、どれも良い香りを漂わせている。大学校内の応接室の一つ、黎明の間 で夜の会食がこれから行われるところだった。とはいっても集まる顔触れはいつもの面々であろう。今は女帝シャウナルーズとラデイスの二人だけが向かい合わせの席についている。給仕の従者が用意を整え、一礼をして部屋を去っていった。

女帝は緑の瞳を細めて楽しそうにラデイスを眺めている。鮮やかな緑のストレートの髪は肩のあたりで真っ直ぐに切り揃えられ、前髪も眉の上で直線的に揃えられている。白のドレスに漆黒の宝石が嵌め込まれたペンダントが、ふくよかな胸元で光を放つ。そしてリリーネ・シルラの使徒の証である、貴重な糸で編まれた輝く長布清廉なる織布 を首から下げていた。

つい先程まで会議に出席していた為、彼女はレーヌ国女王陛下としての正装をしている。

「あの少年はどうだ」

「間違えなければ大物になるだろう」

「そうか」

ラデイスの答えに満足げに頷き、女帝は赤い葡萄酒が注がれたグラスを手にとる。

「連れてゆくか？」

「いや。あれはまだ若い。 光芒の騎士団 にどうだ」

「ふむ。良かろう。……聞いたぞ。お主、その少年に問われ、己は世界を救うと豪語したそうだな」

「ああ」

優雅な仕草でグラスを傾け酒を一口飲んで、シャウナルーズはラデイスを見据え、にっと笑った。

「とんだ大嘘を言いおつて」

その言葉を聞いて、ラデイスは観念した。やはり、この女帝は全てを見抜いていたようだ……。

いつとき二人は強い視線を交わし無言で見つめ合った。

シャウナルーズは外見だけを見れば二十代後半のように感じる。慈愛を湛える美しさは出会った当初と何ら変わらないようだ。しかし、その内面は底知れない。実際の年齢は三十代かそれ以上、五十代だったとしても不思議ではない。落ち着いた雰囲気、絶対的な威厳と、柔らかな品格を併せ持つ美女。

一国の王でありながら地位や身分を好まず、レーヌの民と肩を並べる。どんな相手であれ、人間として接し、信頼し、育ててゆく。峻厳な厳しさを映す瞳と慈愛溢れる両手。卓越した指導力と先見の明。これ程にまで「人」として磨き上げるのには、どれだけの覚悟と自己鍛錬が必要なのか。計り知れない。

ラデイスは俯いて笑った。

「全く、やりづらいな」

「お主は今やただの男に過ぎぬ。一人の女を愛し守ろうとする、一人の男だ」

「なるほどな。だから慌てて召集したのか？」

「雲隠れされては困るからな」

「安心しろよ。俺は戦いを止めるつもりはない。この命はその為に使う。それは変わらん」

「だが表舞台から退くつもりだ。そうであろう？」

「優先順位の問題だ」

そう言うのと、ふふふ、と笑い声が上がった。

「我はお主がうらやましいぞ、ラデイス」

「すまん。シャウナ」

シャウナルーズは、構わぬ、と告げてまたグラスを傾ける。

「少しはテンペイジを休ませてやれ。あれは倒れる寸前だ」

「だからお主を馬車馬のように働かせておるのだ。今は少し、休みがとれているはずだ」

「ああ。そうかよ」

俺が倒れても良いらしいな。苦笑しつつ酒の入っているグラスを手取る。

「あの少年はどれくらいかかる」

言いながら女帝はおもむろに緑のかつらをとった。ふわりと艶やかな黒の巻き髪が、その華奢な肩に落ちる。全く、これは蒸れていかな、と愚痴をこぼした。

壁に控えていた女帝付きの従者が音もなく傍へ来て、織布とかつらを恭しく受け取って下がっていった。

「十日あれば」

「ならぬ。もうあまり時間はないのだぞ」

「なら、五日だ」

「三日やる。それまでに成し遂げよ」

盛大にため息をつく。さすがは一国を統治する王である。何とも横暴。

女帝が一段声を低くして問いかける。

「それから……モドの具合をどう見る」

ラデイスは刹那返答に逡巡し、目を閉じて告げた。

「モド先生は、ご自身で分かっている。早い段階で今後の事を話し合う必要があるだろう」

「……やはりか」

しんと静寂が空間を満たす。

モドはレーヌの大学校には欠かせない存在だ。この大学校の名誉教授であり、研究員であり、医師である。高齢で既に第一線を退いてはいたが、レーヌ随一の知性として現在も若い者達の指導に当たっている。ラデイスは今からちょうど十年前、十六歳でレーヌの大学校を卒業したのち、二年間彼の元で医師としての薫陶を受けた。その恩恵には今でも心から感謝をしている。

その彼は今、目の病にかかり、いずれ失明する。

「ラデイスよ。お主は勇敢で力ある青年に成長したな」

重苦しい沈黙を振り払うかのように、シャウナルーズが慈愛の笑みを浮かべて言った。ラデイスはそれに優雅な微笑で返す。

「お陰さまで」

「しかし満身創痍にも程があるぞ。そのように身体を酷使していたら、あと何年もつか分からね」

「だったら少し休ませてくれ」

「ふふ。それは難しいな。駄目になる前に使わねば」

「言ってくれる。……なあ、シャウナ」

珍しく疲労を滲ませている女帝に静かな声で話しかける。モドの件がやはり、こたえているようだ。

「お前がもし間違っような事があれば、俺がその横つ面を引っぱたいてやるう。命がけでな」

一瞬、緑の瞳が見開かれ、それから頭を垂れて肩を揺らし、声を出さずに笑った。

「何と愉快……。我は幸せ者だ。ああ……。お主になら抱かれてもよい」

「おい。そういう冗談はリンとミッドの前で言っんじゃないぞ」

「ふふふ。あの男、まだ諦めておらぬのか」

「あいつがたちの悪い趣味を持ったのはお前のせいだ」

ミッドラウが泥棒のような鍵開けの名人になりつつあるのは、一国を統べる崇高な王たる女性の、寝所を夜這いせんが為である。何とも罰当たりで、馬鹿らしい男だ。彼は世界を飛び回る運び屋で、今はどこにいるのかさえ分からない。

部屋の外から従者の声がかかり、扉が開いてぞろぞろと人が入って来た。

「おお、ラデイス。もう来ておったか！」

モドが立派な白髭を揺らしてやって来る。その後ろにはフォルクード夫妻、若い研究員達や役員が続ぎ、テンペイジとリインも言葉を交わしながら部屋に入ってきた。書記官アミルと研究員のシモンの姿も見える。シャウナルーズからの伝言があったのだろう、全員制服を着ておらず、楽な格好に着替えていた。あのテンペイジもブラウスとズボンといった普段着姿であるのにはラデイスも驚いた。確かに、少しは休めているようだ。この場で堅苦しい格好をしているのはラデイスとシャウナルーズの二人だけだった。円卓の傍へ並び、全員が一斉に頭を垂れる。女帝はそれに片手を上げて答えた。

「さあ席につけ。待ちくたびれたぞ」

すぐに賑やかな夜の会食が始まった。

「あの後、ロジエルの家に行ったんだ。そしたらお母さんが家に来てね、仕事が休みだったんだって。

ロジエルが物凄い勢いで帰って来たきり部屋に閉じこもってるんだって心配してた。だから言つといたよ、ラデイスが苛めたんだって」

隣に座るリインが料理を頬張りながらこちらを見上げている。ラデイスはその綺麗な赤茶の瞳を眺め、思わず笑った。

「何だその言い草は」

「だってほんとの事だろ？」

「どうしてロジエルの家を知ってる」

「一度お母さんにお茶に呼ばれたんだ。静かだけど優しい人だよ」

いつの間にロジエルの母と仲良くなったのか。確か食堂で働いて

いると聞いた。リインの事だ、そこで言葉を交わして親しくなったのだろう。イリアス族として謂われなき理不尽な差別や迫害の中を生き抜いて来ているはずなのだが、こいつには人見知りという言葉はないらしい。

「ラデイス殿」

向かいの席にいるテンページがこちらに顔を向けていた。大柄な体躯に彫の深い顔立ちの壮年。茶の髪には白いものが目立ってきたようだ。眼鏡の奥の瞳が計るような目つきをしている。隣に座るシヤウナルーズも口元に笑みを浮かべ、ラデイスに視線を注いでいた。

「 厳然たる弾劾者 の事だが。何年いける」

「一年」

即答すると、テンページは目を大きく見開いた。

「それは……いくらなんでも短すぎるのではないか？ 五年でどうだね」

「二年。それ以上は譲れん」

「うつつむ……」

「リイン」

女帝が突然にリインの名を呼んだ。う、と喉をつまらせて、リインがはい、と返事を返す。女帝は柔和な笑顔でリインを数秒見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「高潔なる自由の民。気高く美しいイリアスの子よ、リインよ」

「はい」

「お主は我のものだな？」

リインは一瞬ぼかんとして、それからにつこりと微笑んだ。

「はい」

答えを聞いて、シャウナルーズが勝ち誇ったような笑みを向けてくる。

くそ……。リインを懐柔しやがって。

ラデイスは眉根を寄せて相手を睨みつけ、無言で酒を飲み下した。

風呂で汗を流し濡れた髪を布で拭いつつ、ラデイスは部屋に戻った。室内は繊細な彫刻が施された調度品が並び、大きく開いた窓から月の光が差し込んでそれらを青白く照らしていた。ベッドには壁に背を凭れたリインが、今にも眠りに落ちてゆきそうな顔で書物を開いて頑張っている。最近の愛読書は剣豪ベレンダイが書き遺したと言われている剣術指南書だ。しかしそれはベレンダイが書いたものではない事をラデイスは知っていた。あのぐうたらな剣術の師匠は、そんな甲斐甲斐しい事をするような人物ではなかった。あれは彼の弟子が書き上げたものだ。

ベッドの脇机にあるランプの温かな灯が、リインの整った横顔を照らしている。白く透き通るような頬はほんのりと赤く色づいていた。ベッドの脇に腰を下ろしふつくらとした頬を指先で撫でると、とろんとした赤茶の瞳がこちらを見つめてくる。

「顔が赤いな」

「ん……少しお酒飲んだから」

柔らかな栗色の髪に指を通し梳いてやると、リインは気持ち良さそうに目を細めた。

酒が苦手なリインだったが、ここに来てからというもの酒好きなのシャウナルーズのせいで、少しばかり晩酌に付き合う程度には飲むようになった。グラスに半分も飲まないうちに顔が真っ赤になる。本当は飲ませたくはないのだが女帝の酌を断るわけにもいかず、ラデイスはしぶしぶ目をつぶっていた。

白く細い指先がラデイスの左目の下あたりを優しく触れる。

「左目、こっただけ少し紫色で、すっごく綺麗なんだ」

「そうか？」
「うん……」

リインは常日頃、凜とした空気をその身にまとっている。それは自らのイリアス族の『力』を支配し制御する為に神経を張り巡らせている必要があるからだ。その上今までずっと男性として生きてきているおかげで、今では無意識にしている事なのだろう。

イリアス族の女性であるというだけで、危険な世界だ。気まぐれや遊びではなく生き延びる為に、性別を偽っている。しかし気を抜くと全くの無防備。隙だらけのぐにゃぐにゃになるので、こちらとしては気が気ではない。

酒に酔ったリインは、強烈な色気を醸し出す。

「はあ……ラデイス。良い匂い。……好きだ」

その上思った事をそのまま口にする。危険極まりない。

「もう寝ろ」

手元にある書物を取り上げて額に口付けると、細い腕を伸ばしてしがみついていた。ラデイスはその柔らかな温もりに、一瞬恍惚となる。

「……おい。大人しく寝ないと襲うぞ」

言いながら、しかし既にラデイスの指先はリインの脇腹を撫でていた。滑らかな素肌。程良く引き締まった身体に、柔らかな弾力。

「んん」

くすぐったそうに身をよじって顔を上げたリインに、吸い寄せられるように口付けを落とす。リインの形の良い唇に何度も口付け、二人の呼吸が浅くなり色づいてゆく。

「あ……ラデイス。ラディ、……」
「リイン……」

口付けは徐々に熱を帯び、深いものへと変わった。華奢な身体を抱き寄せ、ゆっくりとベッドへ沈める。ブラウスの下から細くしなやかな足がのぞいていた。

どうしようもなく、欲しいと思う。リインの全てが愛おしい。まるで初めてその快楽を知った頃に戻ってしまったようだ。より強く、夢中になって求めてしまう。

「ん、ん……ッあ……」

リインが身じろいで顔を横にずらし、両手で胸の辺りを押し返してきた。

「ラ、ラデイス。もう……」

熱い息を吐きながらゆるゆると首を振った。力無く抵抗してくるその姿に、激しく欲情する。

「ん……だめ、だ」
「……リイン。そんなに煽るな。理性がブチ切れそうだ」
「ラデイス……だ、だめだって」

リインが泣きそうな表情でぎゅっと睨みつけている。その瞳は深紅に揺らいでいた。鼻先が触れ合う程の至近距離で睨まれると、た

まらない。ブラウスがはだけて白く透き通った鎖骨や肩が露わになっている。

これは……まずい。

「んッ、ちょっ……やめろってばッ」

うごめくラディスの手をがしりと掴んで、リインが声を上げた。浅い呼吸。可愛らしい口元に吸いつきたくなる。

「お前があんまりにも可愛いもんだから、苛めたくなった」

「へ、変態っ」

ラディスは意地悪な笑みを返し、銀色のピアスが光るリインの耳朶を噛んで囁く。

「ああ……そうだ。やっと、気付いたか？」

びく、と身体を竦ませ、リインが真っ赤な顔で抵抗する。

「もっ……やめ、ろって」

リインの怪力で胸倉を締め上げられて、ようやくラディスは身体を離れた。どうやら完全に覚醒したようだ。そのままベッドへねじ伏せられてしまった。上体を起こしたリインが肩で息をしてラディスを見下ろす。

「あ、あんた疲れてんだから、ちゃんと寝なきゃダメだろっ」

「睡眠よりお前が欲しい」

「んなっ」

耳まで真っ赤にして口をぱくぱくさせているリインを眺めて微笑む。ああ……愛しいな。

「それに俺は別に疲れてないんだが」

「そんなわけないだろっ。シャウナルーズ様が言ってたもん」

「何？」

「ラデイスにたくさん仕事させてるって。だから疲れてるはずだから、夜はよく眠った方が良いつて」

「……あいつめ。地味な嫌がらせをしゃがって」

「ラデイス！」

むっとした表情のリイン。

「前から言おうと思ってただけどさ、あんたシャウナルーズ様に失礼すぎるよっ」

ラデイスは眉を上げて答える。

「あのなあ、リイン。お前はどうかやらあの女帝を手放して信頼しているようだが、あいつはかなり抜け目なく計算高い奴なんだぜ」

「何だよそれ。ラデイスじゃあるまいし」

聞き捨てならない。これはかなり面白くない展開である。ラデイスは腕を伸ばし力づくでリインを引き寄せて組み敷いた。

「わっ」

細い手首を掴んで押さえつける。じっと赤茶の瞳を見つめると、リインの頬がまた赤く染まっていった。

「あいつは今頃、俺を操る手綱を手に入れてほくそ笑んでる事だらうな」

「……何。どついつの意味」

その問いには答えずふつくらとした唇に軽く口付けると、う、と小さく反応する。

「だ、だからっ！ もう寝ろよっ。子守唄うたってやるから！」

「俺は駄々をこねるガキと同じか」

「分かってんなら、ぐずるなよっ」

ラデイスは笑ってどさりとベッドに寝転がった。

疲れていないと言っていた彼だったが、子守唄を歌い始めた途端に深い眠りへと落ちていった。温かなランプの灯が美しい寝顔を照らしている。その顔にかかる薄茶色の髪はぼさついでいて、まだ濡れていた。リインは起こさないように布で髪を拭い、ぼんやりとラデイスを見つめる。

ブラウスのボタンが適当に止められているせいで彼の広い胸板が見えた。右胸には古い焼印がその肌に刻まれている。イリアス族が奴隷であった頃の残酷な刻印。そつと腕を伸ばしてそれに触れた。他にも引きつれたような無数の傷痕がある。鞭の痕だ。いかに壮絶な拷問を受けたのかが、それで分かる。

短剣が貫通した右腕の傷は一応ふさがってはいたが、日中はまだ包帯を巻いていた。ラデイスは何も言わないが、もしかしたらまだ痛むのかも知れない。今は包帯をしていない。右腕の肘のすぐ下あたり、傷口の部分が溝のようにへこんでいて、そこだけ皮膚が薄くなっているみたいに見える。指でなぞるとぼこぼことしていた。い

びつな形の傷跡。

この大学校に来てからも、ラデイスはずっと忙しそうだった。シヤウナルーズ様から聞いた。今は枢機議会の要であるテンペイジ議長と同等の仕事をこなしているのだそうだ。それは通常三つの分野に分担されている大学校の運営、医療関連、政治の分野の全てに精通していなければ成せない事だ。

本当は心配でたまらない。ラデイスは一向に自分の事を顧みない。一度だけ、リインは彼に黙って『命の力』を使った事がある。まだ傷の癒えない頃、ラデイスが寝入った後にこっそりとその『力』を発動させた。自分の命を削って、相手の体力と治癒力を引き上げる事が出来る『力』だ。しかし翌朝目覚めた時、すぐにばれてしまった。普段よりも身体が軽かったそうだ。彼は自分の体調を厳密に管理していたのだ。

怒られるかと思っただらそうではなかった。ひどく辛そうな表情で悲しそうな瞳を向けて、頼むからやめてくれと懇願されたのだ。その時の事を思い出すとまた胸が痛む。

ラデイスは僕が『命の力』を使うと、とても傷つく。それで降りインは『命の力』を使う事はなかった。使う気すら起きない。彼を傷つけたくないからだ。

ふうと息を吐き出して右腕にある漆黒のブレスレットに触れ、それを外して脇机の上に置く。

何の話をしていたのだろう……。夜の会食での事を思い起こす。ラデイスとシヤウナルーズ様は、時々声を出さずに会話をするのだ。二人で無言で見つめ合い、視線だけで言葉を交わす。聡明な二人であるからこそ出来る事なのだろう。自分はそれを黙って見守るだけだ。だって目だけで会話をするなんて芸当が、自分に来るわけがない。そして二人が交わす内容を理解出来ない自分にいらいる。少し妬けてしまっけれど、絶対に悟られないようにしているつ

もりだ。そんな事にまで嫉妬する自分が何だか情けないし、恥ずかしい。

ぼんやりと物思いにふけっていたリインは、ふと顔を上げて大きく開いた窓を見つめる。

何だ。誰かが、この部屋を見ている。僅かな殺気を感じ取った。外からだ。

するりとベッドから降りて、音を出さずに窓に近寄ってゆく。きりきりと視線が厳しくなり、瞳に深紅の炎が宿る。窓の傍から身体を出さずに外を見渡した。月光に青白く照らされた大学の庭園。ささやかな虫の音。人の影は見えない。だが確かに誰かがそこにいて、こちらを見ている。

リインの全身から、鋭い殺気が放たれる。

誰だろうと、許さない。

自分は弱いしそんなに賢くもなくて何も出来ないけれど、今、この安らかな時間だけは護りたいと思う。僕に出来得る限りの事を。せめてこの眠りだけは、誰にも破らせない。

……僕が、護る。

ここに来れば、答えが見つかると思っていた。
ここに来れば、きっと、全てが良い方向へ変わってゆくと信じていた。

だが実際はどうだ。何一つ変わらない。

「頑張ってくるんだよ、ロジエル。母さんも今日は仕事だからね。そういえば昨日は随分遅くに帰ってきたみたいだけど、大丈夫なの？」

玄関口で母が心配顔を向けている。黒の髪を一つに結わえ、白のブラウスに薄緑のスカートに前掛け。頬にはそばかすが散っていて少し垂れ気味の両目は、いつも眠たそうに見える。その目は自分と同じロガート族特有のもの。黒の瞳に光が反射すると銀灰色に輝く。

「ちよつと残って稽古してただけだよ」

「まあ。一生懸命なのは良いけど、あんまり根詰めたらいけないよ」
「……行ってきます」

にこにこ微笑む母にちらりと視線をやって、ロジエルは朝日に輝く石畳の上を道場に向かって歩き出した。

今日も嫌味なくらいの青い空。きらきらと輝く緑に民家の赤い屋根。坂道の多い町には澄んだ水を湛える水路が小川のように流れ、小さな橋が点々と架けられている。そこをなるべくゆっくりと歩く。遠くからでも巨大な遺跡みたいな大学の茶色い校舎と、大聖堂の真っ白な円天井が緑の中から聳えているのが見える。自然と憂鬱なため息が口からこぼれた。

*

剣術道場にはあの伝説の剣豪ベレンダイがいるのかと思っていたら、本人は数年前、とっくに他界していた。

彼の自叙伝や剣術指南書を何度となく読んだ。本が擦り切れるまで、暗記するまで、読み込んで剣術を身につけたのだ。ベレンダイ先生に会えれば、きっと自分は変われると思っていた。なのに来てみたらその先生はいない。手合わせを試みたら、すんなりと勝ってしまった。それから皆の目つきが変わったのを、肌で感じ取った。怯えているのだ。

何故、一度も師の元で剣術を学んだ事のない子供が、これ程強いのか。尋常ではない。やはりロガート族の血が、そうさせるのだろうか。

ロガート族は武芸に長けた者が多い種族である。好戦的で、攻撃的。ロガート国は現在でさえ他国に心を開かず、軍事国家として世界を威圧している。国境沿いでは常に小競り合いが勃発し、緊張状態が続いているのだ。その上良くない噂が後を絶たない。

今はあの異形の怪物、イグルを戦争の兵器に育て上げようと恐ろしい研究をしているともつぱらの噂。人を拉致してはイグルの毒をその体内に入れて感染させ、ヒト型のイグルを作り出しては実験を繰り返しているとか……。だからグナーの村にいた時も、ロガート族の者達は随分と肩身の狭い思いをしていた。

その国から逃れてきた移民なのだが、他の種族の人々は自分達を恐れ、嫌がるのだ。

ロジエルは母と二人きり、ひっそりとその村で暮らしていた。面と向かって苛められたり嫌がらせを受けたりする事はなかったが、ひそひそと陰口をたたかれていたのは知っていた。いつも常に壁を感じていた。埋めようのない深い溝が、自分達と他の種族の人々と

の間に闇を落としているのだ。

自分達が何をしたというのだろう。辛い毎日を送り、やっとそこから逃れて来たというのに……。悔しくて仕方なかった。怒りのやり場がどこにもなかった。だから一人、剣を振るった。

夜、月明かりの落ちる原っぱで、一人きりで無心になって剣を扱っていると思議と心が落ち着いた。

剣の腕はぐんぐんと上達していった。それ程好きなら、と母が二つ先の村にある剣術学校に通わせてくれた。しかしそこも僅か数日で辞めてしまった。先生と呼ばれている大人が、ロジエルに対してあの目つきをしたからだだった。

そんな奴に教わるものなんか、一つもあるものか。

この頃だった。三つの村の合同で、剣技大会が行われたのだ。グナーの村からはロジエルの他に四名の腕に自信のある者が選出された。けれどロジエルは嫌でたまらなかった。こんな時だけ、自分をまつり上げようとする大人達に嫌気がさした。しかし母がとても嬉しがって泣いて喜んだので、しぶしぶ大会へは出場した。結果は優勝を逃し二位であった。村の人々や母が良くやったと褒めてくれたが、本当は、優勝出来た戦いだっただけだ。

その大会の会場にはレーヌ国の女王陛下シャウナールズ・ルメンディアナが来賓として出席されていた。この国の女帝は、こんな小さな村の大会へも足を運ぶのかとロジエルは驚いた。そして更に驚いた事に、たった一人の護衛だけを連れて村を訪れ、ロジエルの粗末な家に来て来たのだった。薄っぺらくてがたがたのテーブル席に座って、母の淹れた薄い茶を飲んで、ロジエルに微笑んだのだ。

こんなに綺麗な微笑みは、今まで一度も見た事がなかった。

こんなに優しいまなざしを、今まで一度も、母以外の人から向けられた事はなかった。

お主には剣術の才があるう。どうだ、我の元に来ぬか？

女帝は多くは語らなかつた。ロジエルは彼女の美しい顔を見つめ愕然とし、母はその後ろでしきりに恐縮し、また目に涙を浮かべていた。

レーヌの首都に移り住んで、ベレンダイの道場で全員を負かしてから、幾日も無為な時間を過ごした。

ある日ルキリア国から、とてつもなく強く、大学校始まって以来の天才とも称される者が帰ってくるという連絡が入った。シャウナルーズ様やテンペイジ議長からも絶大な信頼を寄せられる人物。更にその護衛としてもう一人、イリアス族の英雄の子ども一緒だという。その子供はイリアス族を真の解放に導いた人物なのだそうだ。皆がそんな一報にうかれて頬を紅潮させた。

それがラデイス・ハイゼルとその護衛、リンだった。

ロジエルもその二人には興味を持った。何せ聞いたところによれば、二人はとんでもなく過酷な人生を歩んでいるのだ。それにイリアス族にも興味がある。

十八年前までルキリア族に奴隷として虐げられ、永い歴史の中で差別と迫害を受けてきた種族だ。ルキリア国内に発令されていた、イリアス族に対する警戒令が解かれたのもつい最近の事。世界を牛耳るルキリア族の取り決めが、全世界に及ぼす影響は大きい。イリアス族は自らの国を持たない流浪の民だ。国を離れ細々と暮らす移民の自分とも共通点があるような気がした。

しかしそれも実際に当人達を見てみたら、期待はずれでとてもがっかりした。

イリアス族のリンは予想に反して女性だったし、ロジエルが考えていたような人物ではなかつた。それにラデイス・ハイゼルは左目と右腕を負傷して以前のように剣を振るえなくなっているらしい。一部の大人達が嗤って話しているのを聞いた。確かにびっくりする

程の美形だが、それだけだ。

原因不明の苛々が募る。

どうしてあんなに笑っていられるのか。どうして明るく他の奴らと会話が出るのか。ラインの屈託のない振る舞いが、やけに目につく。あいつはきつと、たいして苦しい思いなんかしていないのだ。だってそうだろう。人に苛められたりしていたら、あんな風に他人に心を開いたり出来なくなるはずだ。恵まれてるんだ。そう思った。剣の腕だって強い部類には入るだろうが、自分よりかは遙かに弱い。馬鹿みたいだ。こんな奴をちやほやする周りの連中もどうかしてる。こんな女を護衛にしているラデイスだって、同じだ。馬鹿ばかりだ。また一気に心がさめていった。

何も変わらない。ここにも自分に教えてくれる人はいなかった。

答えはなかった。

誰も、いなかった。

そう思っていた。あの時までには。

*

夜も更け、中庭の背の低い木々の中でロジエルはじつと息を殺して身を潜めていた。高い空には満月より少し欠けた月が昇っている。むっとする程の緑の匂いと涼やかな虫の音が薄暗い闇夜を包む。その中に佇むロジエルの視線の先には、ランプの黄色い灯りが漏れる窓。校舎のあの部屋の窓に灯りがついてからだいぶ時間がたつ。あそこは来客用の部屋ではないのだが、確かにあいつらが入って行った……。

ロジエルはその日一日をレーヌの町や大学校の広大な庭園などで過ごした。へたに道場に近づいたら、ラインに見つかって面倒な事になるので、気をつけながら相手の動向を探った。何とかして接触する機会を狙っていたのだが、相手は常に忙しそうに動いている為

に近づくチャンスが全くなかった。結果、またこんな時間までかかってしまった。

よし、と勇気を振り絞ってすつくと立ち上がる。周囲に誰もいない事を確認して、ロジエルは一直線にその部屋目指して、駆けた。中庭から大学校のつるつるの廊下に入り、そろりと足音を忍ばせて、部屋の扉の前でまたじつと気配を殺す。ここまで来ておいて何だが、この扉の取っ手を掴む勇気が出てこなかった。

やっぱりやめようか……帰ろうかな。

「突っ立ってないで、入れよ」

突然、部屋の中から聞こえて来た声に驚き、身体がびくりと小さく飛び上がった。心臓が口から飛び出るかと思った。

何だ……ばれてたのか。観念してそろりと扉を開き、室内の明るさに目を細めた。この部屋は書斎のようで壁一面が書棚で埋め尽くされている。その前に幅広の作業机があり、ラデイスがそこで何やら書き物をしていた。机の隅には書物がうず高く積み上げられている。慎重に足を運び、後ろ手で扉を閉め、そこで気がついた。部屋の隅にある長椅子に横になって眠っているラインがいた。薄手のシートがかけられている。気の抜けた寝顔を見て、張りつめていた緊張がぷつんと途切れてしまった。ロジエルはふうと息を吐き出す。

「……護衛の意味、ないじゃないか」

「まあそう言うな。誰かさんが今日一日、殺気のコモった目で俺の事を睨みつけるもんだから、こいつはずっと気を張りっぱなしだった」

はつとして顔を上げるとラデイスは書き物をしていた手を休め、こちらに顔を向けていた。今は黒い眼帯ではなく、片っぱだけのレンズが高い鼻にひっかかっている。目が合うと、にっと笑顔になっ

た。

「遅かったな」

「え……」

「昨日には来るかと思っていた」

ぎくりとする。本当は昨日もすぐ近くまで来ていたのだ。ラインの凄まじい殺気に、動けなくなってしまっただけで逃げ帰った。あんなに恐ろしい気配をまとう奴だとは思ってはいなかったし、それが今長椅子でぐうすか寝ているこいつと、同一人物とは到底思えない。

ラデイスが眼鏡を外して席を立った。

「ついでこい」

ずかずかと扉に向かってやってくる。その手には練習用の木剣が二本。ロジエルは慌てて無然とした表情を作り、口を開いた。

「お、俺、別に！　そういうつもりで来たわけじゃっ」

すぐ傍まで来ていたラデイスがきょとんとした顔で少年を見下ろす。

「ん？　じゃあ何の為に来た」

「前に言った事、取り消してもらおう為に」

「何だそれは」

「俺の成長が止まるとか、勝手に決めつけて……」

くく、と低い笑い声が聞こえた。ロジエルはむっとして見上げるようにラデイスを睨みつける。彼の青い瞳の奥が、黄金色に光って

いた。

「悔しいか？ だったら俺を負かせてみるよ」

言い置いて先に部屋を出て行ってしまおう。

「ちよっ……」

振り返るが、背の高い後ろ姿は既にすたすたと廊下を歩いて遠ざかるうとしていた。ロジエルはいまいましたげにその背を睨む。

どうして俺が従わなきゃいけないんだよ！ 絶対についていくもんか！

しん、と部屋が静まりかえる。書斎に取り残された自分。ぐうぐう寝ているリイン。これじゃあ何の為にここに来たのか分からない。今日一日が無駄になってしまう。

何て強引な奴！ 何て勝手な奴！ 何であんなに偉そうなんだよ！

「これだから、大人って嫌いだった！」

ロジエルは憤慨しながら足早にラデイスの後を追った。

月明かりの落ちる芝の上で、やっと彼の足が止まった。振り返り、ロジエルに向かって木剣を投げて寄こす。ロジエルは器用にそれを受け止めて視線を足元に落とし、もう一度彼に言った。

「……別に剣術を教わるつもりも稽古をつけてもらうつもりも、一切ないんだけど」

「分かってる。俺の右腕のりハビリに付き合ってくれ。俺の相手が出来るのは、お前くらいだ」

「何でそんな事」

「お前はもつと強くなりたいたんだろう？」

おそろおそろ顔を上げる。先に立つ長身の彼はこちらを真っ直ぐに見つめていた。薄茶色の柔らかそうな髪。青い瞳は闇に沈んでいるが、その奥の金色が輝いている。上品な鼻筋にすっきりとした顎の曲線。左右対称の、嘘みたいに圧倒的な美しさ。切れ長の瞳に見つめられ、ロジエルは思わず見惚れてしまった。

「俺はお前にはない技術を持つてる。俺を踏み台にすれば良い。使えるもんは利用しろよ。俺もお前を利用して」

と言って、上手に口元を持ち上げ不敵に笑う。

「ふ、ふん」

ロジエルは静かに木剣を両手で構えた。顔が熱い。不覚にも彼の顔に見惚れてしまった事が腹立たしい。

そこまで言うんなら、利用してやる。あいつの技術を盗んで強くなって負かしてやれば、きっと気持ちやすつとするに違いない。

ふわりと優しい香りを嗅いだ気がして、リインはうつすらと瞳を開いた。すぐ近くに温もりを感じる。身体がふわふわと揺れていて心地良く、まどろみの中でまた目を閉じた。

書齋にいたところまでは覚えている。どうやら自分はその中で寝てしまい、今ラディスに抱き上げられて運ばれている途中だと気付く。

「…………ごめん」

「寝てて良いぞ」

リインは寝ぼけたままラデイスの首元に頬ずりをした。ああ、良い匂い。リインの頬が、彼の素肌に触れている。しっとりとした感触。無意識に鼻を押し当てて匂いを嗅ぐ。あれ……。

「ラデイス……汗かいてる」

ふん、と鼻で笑った気配。

「お前を犬と間違えそうだ」

どうして汗なんか、と思いつながら、強烈な眠気に耐え切れずリインは深い眠りへと落ちていった。

「ロジエル！」

しまった。見つかった。聞こえないふりを決め込み、すたすたと歩き続ける。芝を踏んでやってくる足音が聞こえ、ぽんと肩に手を置かれた。

「ロジエル、無視するなっつてば」

赤茶の瞳と目が合う。こいつは今日も律儀に道場の道着を着ている。ロジエルは足を止め、わざと大きなため息をついてラインに告げた。

「今日はやらないかな」

「何だよ」

「そんな気分じゃない」

というより、動けない。昨夜の疲れがまだ残っている。あの後結局夜更けまで剣を振るっていた。ラデイスの策に自分がまんまと嵌まっているような気がして、それが気に食わないが……。だけどやっぱり、剣を扱っている時間が一番好きだ。その上やっとな自分が本気を出しても負かす事の出来ない相手に出会えたのだ。全力で行う勝負はとても楽しかった。

ラデイスは最初に言った通り、剣術に関して指導するような事は一切口にしなかった。しかし他人とじっくりと剣を交えてみて色々と分かった事が、数多くあった。今まではそんな機会さえなかったのだ。

「何だ、つまんない」

リインの素直な言葉を聞いて、ロジエルは頬を赤く染めた。その初めての反応にリインの目が丸くなる。

「ロジ……」

「あ、明日な！」

言い捨てて急いで駆け出した。疲れているせいで身体が重かったが、何とか足を動かした。心臓が弾む。大学の広い庭園を突っ切るように駆けながら、ロジエルの口元がこらえ切れずにんまりと微笑んでいった。駆けているせいで風を受け、長めに伸ばしている前髪が後ろへと流れる。視界がぱつと開けたみたいだ。

嬉しかった。単純に。自分との時間をそんな風に思ってくれる、他人がいる事が。

今日はもう家に帰って寝てしまおう。母さんが心配するかな。でもちよつとでも体力を残しておかないと。今夜は自分の剣を持ってこいと言われた。本物の剣で勝負をするなんて、久しぶりだ。わくわくする。

小さくなつてゆくロジエルの後ろ姿を見送り、リインは首を傾げて道場へと帰った。そこで師範より自分に来客があったようだとの伝言を受け、サンダルを履いて大学校へと足を向けた。

「リインさん。こっちですよ」

道場から大学校の庭園を横切つて中庭に回り、廊下上がったところでレーヌ族の青年に声をかけられた。黒の短髪、ひよろながの

体躯。確かラデイスと一緒にいた、シモンという名の青年だ。ペコリとお辞儀をしながら近づいてゆくと、シモンは微笑を浮かべてリインを見下ろした。

「へえ。可愛い人だ」

ぎょつとしてシモンを見上げる。黒地に金の線が入った枢機議会の制服姿で両手を腰に当て、にこにここと微笑んでいる。

「お客さんがお待ちですよ。私が案内します」

彼は自然な動作でリインの腰に手を回し、先を促すように歩き出した。リインは啞然としつつそれに従う。以前に会った時とは何だか雰囲気が違うようだ。

「あなたが護衛なんていう危険な仕事をしているなんてね。とても麗しい女性であるのに」

「……は？」

鮮やかな緑の瞳がリインを見つめている。シモンが腰をかかめてぐつと顔を近づけてきた。彼は意外にくりつとした目をしていて、中性的な雰囲気がある。

「ラデイス先生がとても大事にされているようだ。……先生のご苦労は絶えないだろうな」

「あの？」

リインは僅かに眉を寄せてシモンを見つめ返す。相手は楽しそうに笑っている。

「綺麗な肌」

囁いて、リインの頬に素早くキスして、舌を出して舐めた。リインは突然の言いようのない感触に驚き、ぬわ、と奇妙な声を上げ勢い良く後ずさる。

「その反応もまた可愛い」

片手で拳を作り、それを口元に当てて彼は笑っていた。

「シ、シモン!？」

「何です?」

「君、二重人格?」

訝しむリインをよそに、シモンは声を上げて笑い出した。何かおかしいのだろう……。リインは舐められた頬を拭い、顔をしかめた。

「そう思っていたいて結構です」

「……勝手に、他人のほっぺを舐めるのは良くないと思う」

すみません、と微笑んで、彼はリインの肩に手を回し歩き出す。リインは慥然として彼を見上げるが、シモンは一向に気にしていないようだ。長い廊下の向かいから大学の深緑の制服を着た女性があらわれ、こちらを見て会釈をした。

「ああ、こちらにいらっしやっただんですね。すみません、リインさん。お客様は先程帰られまして、また明日来ると伝言をお預かりしました」

告げて、女性はまた会釈をして去って行った。シモンは芝居がか

った仕草で片手を額に当てて天を仰いだ。

「残念。もっと早くお呼びすれば良かった。すみません。ですが私はこうしてあなたにお会い出来た事に感謝しますよ」

「はあ……。じゃあ僕、道場に戻っても良いですか」

「ああ。そうですね。失礼しました」

リインは首をひねって道場へと歩き始める。背後を振り返るとシモンがまだこちらを見ており、笑顔でひらひらと片手を振っていた。

「そ、それっ！ その剣！！」

夜の静寂に包まれたベレンダイの道場に、ロジエルの声が響き渡った。今夜は曇っていて月が出ていない為に、ランプの灯が点々と照らす道場にロジエルとラデイスはいた。

「知ってるのか。さてはお前もあの自叙伝を読んだくちか」

「知ってるも何もっ！ そ、それは剣豪ベレンダイが持ってたっという名剣……。伝説の刀匠、ヤゴフレットの最後の一振り！」

ラデイスが面白そうな表情で眉を上げた。

「随分と大げさな言い方だな」

彼が片手で持っている剣は、あのベレンダイの自叙伝にも描かれているものだ。柄の部分にレーヌ国の紋章が描かれ、柄頭には一粒の小さな結晶石が嵌め込まれている。人を斬るようには出来ていない、特別な細工が施された剣。持つ者を選び、その腕を問う、意思

を持った剣だ。余程の腕ではない限り、これで人を斬る事は出来ないと解説されていた。そんな歴史的にも偉大な名剣を、何でこいつが持つてるんだ。

「あ、あんたまさか。あんたの剣の師って」

「ベレンダイだ」

さらりと告げられた答えに、ロジエルは息をのんで目を見開いた。あの！ 伝説の剣豪の弟子！？ こいつが！ …… どおりで強いわけだ。

「とにかく始めるぞ。勝手に道場を借りてるからな、見つかったら怒られる。俺はこの師範達がどうも苦手だな」

愕然としているロジエルにはお構いなしに彼は右腕で剣を構え、あの独特の呼吸を繰り返して集中力を高めてゆく。その一息ごとに周囲の空気が冷えて張りつめる。気合を入れて立っていなければ、恐ろしい程の殺気に当てられて動けなくなってしまう。ロジエルは慌てて目の前のラディイスに集中する。

「ロジエル」

「……何」

「本気を出せよ。気を散らさず一点に意識を込める。そうしなければ怪我をする」

緊張が高まる。冷徹な程に落ち着いたラディイスの全身から立ちのぼる気配に、ロジエルはじわりと冷たい汗をかいた。

「行くぞ」

高い金属音が、静謐な空間を切り裂いた。

ただただ、無心で剣を振るった。頭で考えている暇なんてない。集中力を高め息をつめて、相手の動きを感じ取る。目だけではなく、全身で。すると自然と身体がすぐさま反応するのだ。

相手の身体が僅かに右に傾ぐ。片方の足に重心が寄り鋭い呼吸音が耳を掠める。それだけで次の一手を読んで、先んじて攻撃をしかける。しかし自分のその動きもまた相手に読まれている。防がれ、一歩退いてもう一度軽やかに踏み込んでゆく。

ここまで自分が動けるとは思わなかった。まだまだ、やれる。もっと、もっとと速く動くんだ。こんなもんじゃ相手は倒せない。もっと速く、もっと重い一撃を。

楽しい。

何て楽しいんだろう！

剣を持つ手に今までにない感触が走り、ロジエルは我にかえった。ぱつと真つ赤な液体が道場の床に数滴落ちていった。それが人の血液である事を認識した少年の身体から、一気に血の気が引いた。悪寒がぞわりと全身を駆け抜ける。目の前にいるラディスの、左の二の腕あたりの服がすっぱりと切れて、そこから血が流れている。自分の持つている剣の先が少しだけ赤く染まっていた。

何て事だ！ 斬ってしまった！！

その時、力の漲るラディスの瞳が一瞬で目の前から消えた。ロジエルの剣が弾き飛ばされ、首元で彼の剣がぴたりと止まった。瞬間に身体が強張る。あまりの速さに何の反応も出来なかった。

「勝負あつたな」

肩で息をしながらラディスが笑った。ゆったりとした動作でロジエルから離れ、剣を鞘に納める。ロジエルは彼を凝視したままよろ

よると後ずさった。

「途中で急に気を抜くな。刺しちまうところだった」

ラデイスはズボンに手を入れて白い布を取り出し、端を口に挟んで素早く左腕に巻き付けて縛り上げた。それから乱暴にも足の裏で床に落ちた血を拭いた。ロジエルはその場にへたり込んで尻もちをつき、ぜいぜいと荒い呼吸を繰り返す。必死に言葉を構築しようと試みるのだが、うまくいかない。

人を傷つけてしまったのか。何て事をしてしまったのか。自分の剣が、人を傷つけ、血が流れた。

「お、お、俺……」

傷つけてしまった。こんな自分を気にかけてくれた人を。ラデイスを、傷つけてしまった。どうしよう。何て言えば……。

「おいおい。そんな死にそんな顔をするなよ。かすっただけだぜ」

目の前にどつかりとあぐらをかいて、ラデイスが顔をのぞきこんできた。薄茶色の髪が汗で額に張り付いている。

「で、でも」

「くっ……」

突然、声を上げて笑い出した。心底楽しそうな笑い声。愕然とする自分の事なんかそっこのけで、目の前で笑っている男。何。何なんだ。

混乱していたロジエルの意識が、だんだんと覚醒してゆく。

「何だよ！」

「くく……。お前は何とも可愛げがあると思ってな」

赤面しつつ、むっとする。

「あいつなんかもつとひどかったぞ。リンは俺の脇腹をぶすりと串刺しにした事がある」

「ええッ！！」

「あれはさすがに痛かった」

ロジエルはこれ以上出来ない程に目をむいて口を開け、彼の整った顔を見つめた。

「な、何て凶暴な女なんだ……」

「そうだろう？ 今の今まで俺も忘れていた」

肩の力が抜ける。やわやわと口元が緩み、思わず笑ってしまった。……ラディスはこんな事で怒ったりしないのか。良かった。

緊張がほぐれると、どっと疲れが全身に押し寄せて来た。心地の良い疲れだった。ばったりと仰向けに倒れ込むと、薄闇に溶ける道場の高い天井が見えた。

「あつはは……疲れて動けないや」

「全くだ。俺も年かな」

「おっさんにはこたえるだろ」

「こんな美形を捕まえておっさんはないだろう」

「……自分でそんな事言つて、恥ずかしくないの」

「どこに恥ずかしがる必要がある。それが事実だ」

「偉そうに」

「現に俺は偉いからな。仕方ない」

「……あっそう」

「誰だ！ 神聖な道場を無断で使っているのは！」

びりびりと響く野太い声にぎよっとして、慌てて身体を起こして振り返った。遠くの出入り口に人がやってくる気配がするが、暗くて分からない。突然に身体がぐらりと持ち上がった。

「わわ、ちよっと！」

「さつさとずらかるぞ」

ラディスがロジエルを片腕でかかえ上げて、空いている手に剣を二本持つて駆け出した。

「こらっ！ 待たんか！」

背後から声が追いかけてくる。ラディスはそのまま広い芝を駆け抜け、一目散に逃げた。どうやら本当にあそこの師範が苦手らしい自分と一緒に。こんな大きい大人なのに……。笑ってしまう。

それから大学の出入り口まで送られ、家まで送ると言うラディスを押し返して家へと駆けて帰った。

「明日も来いよ。仕上げだ」

うん、分かった。心の中だけで返事をした。

先に寝ていると言われたが、そんな訳にはいかない。

リインは寝たふりをしてやりすごし、しばらくして剣を手にしたラデイスが部屋を出ていったのを確認してから気配を殺して足音を消し、後をつけた。そしてベレンダイの道場に灯がともり、ラデイスとロジエルの手合わせが始まったのだった。驚きつつ、身を隠し息を詰めてじっと見守った。

二人の剣さばきは尋常ではなく、その動きは目で追うのがやっとの程だ。本気で剣を扱う、鬼のように強いラデイスと対等に渡り合う、少年のロジエル。彼の秘められた才能は本物であり、しかも伸び白は未知数。たった今、それをはつきりと実感した。

その時、自分の背後に何者かの気配を感じ、リインは反射的に振り返った。目を細めて廊下の先を睨みつける。闇の中からおどおどとした影が現れ、相手はリインの殺気に怯えつつ囁いた。

「す、すみません」

黒の短髪に緑の瞳。シモンだ。今は制服ではなくブラウスに黒のズボンという格好。リインはふっと小さく息を吐き出して肩の力を抜いた。

「……………すごいですね。あの少年」

シモンの視線はリインを通り越し、道場の二人に注がれていた。驚いているような感嘆しているような、そんな表情。昼間会った時の人を食ったような彼ではなく、控えめで大人しい印象のシモンだった。リインとシモンは寄り添うように壁に張り付いて、二人の勝負に無言で見入った。

ロジエルの動きが徐々に研ぎ澄まされてゆく。速い。ほんの瞬間の間ほど、たった僅かのずれが生じ、ラディスの左腕に少年の剣が当たったように見えた。鮮やかにラディスの服が切れ、次の瞬間にはロジエルの動きが唐突に止まった。

無意識にラインの身体が反応し飛び出そうとしたところを、シモンが両腕で押し留めた。抱き寄せられる格好になり、ラインはシモンを見上げる。彼は先にいる二人に視線を向けたまま、小さく呟いた。

「先生は大丈夫です。避けられたのに、そうしなかった」

「え……」

決着しラディスが剣を収め、白い布で手早く腕の傷を覆う。

「なるほど」

シモンが感慨深げな囁きを落とした。間近で見ると、ひよろりとした体躯の彼ではあるが顔の輪郭は少しふっくらとしている。ラインがもの問いたげな顔を向けると、その視線を感じたのか彼が口を開く。

「固く閉ざしていたあの少年の心に、先生はどのようにして入ってゆくのかと考えていたんです。驚いた……。とても単純で、強引な手口でした」

「どつという事？」

ラインとシモンはひそひそと言葉を交わす。

「あれは、わざと切られたんです。緊張と緩和。共有と無償の救し。ほら見て下さい」

道場の灯の中にいる二人は座り込んで、ラデイスの朗らかな笑い声が聞こえて来た。ロジエルの声がして、二人の会話が始まる。確かに二人の距離がぐつと縮まったような気がする。

「最初に迷いの道に風穴をこじ開けて、開きかけていた扉を鷲掴みにして押し入る。……先生らしい」

リインは先にいるラデイスとロジエルをぼんやりと眺め、そういえば、と思い起こす。

自分も随分前にラデイスを傷つけた事があった。短剣で彼の脇腹を突き刺したのだ。出会ってすぐの事だ。とても申し訳ない気持ちになり、自分でした事だったのだがひどくショックを受けた。しかしラデイスはそれさえも全てを受け入れてくれたのだ。そこまで考えて、待てよ、と思う。

「それじゃああれも……」

「誰だ！ 神聖な道場を無断で使っているのは！」

自分達のいる廊下の向かいにある通路から野太い声がして足音が響いた。暗闇の中リインとシモンは身を固くして息を殺す。道場にいたラデイスはロジエルを軽々と抱え上げて、中庭の芝へと駆け出してゆく。

「こらっ！ 待たんか！」

道着姿で口髭を生やした師範の姿が灯の中に現れた時には、二人は既に逃げ出した後だった。リインは無意識に呟く。

「まさかこれも、計算のうち？」

「……かもしれません」
「なっ……。ラデイスって」

恐ろしい。何だか騙されたような気がしてくる。そこで、自分の身体を抑え込んでいる両腕に気付いた。

「あの、シモン。もう離してくれて大丈夫だよ」

「あ！ うわわっ！ す、すみませんっ」

シモンは両腕を頭の上まで掲げ、慌てふためいて何度もリインに謝った。彼の狼狽ぶりに笑い、手を振って別れた。何だかとっても不思議な人だ。昼間にほっぺを舐めた人物だとは思えない。リインは頭を掻きながら薄暗い廊下を歩いて部屋へと戻った。

その小さな背を、じっと見つめるシモン。ゆっくりと片手を動かし拳を作り、口元に当てて笑った。

「柔らかくて良い匂いだ」

暗闇でにっこりと微笑む。

手当てを済ませて部屋に帰って来たラデイスを待ち構え、リインは彼を睨みつけて言い放った。

「あんたって、おっかない奴だ。詐欺師だ。腹黒悪魔だ」

扉の取っ手を持ったままのラデイスが、ぱかんとした表情でリインを見つめ返す。

「急に罵るなよ。押し倒したくなる」

「な、何だよ。訳わかんない」

「ああ……さすがに疲れた。ライン、水をくれ」

頬をぷつと膨らませながらテーブルにある瓶を鷲掴み、グラスにごぼごぼと冷えた水を注ぐ。ラデイスが年寄り臭い呻き声を上げて椅子に座り、手渡されたグラスを傾けて一気に飲み干した。ラインは向かいの席に腰を下ろし頬杖をつく。

「そんなに使って平気なの……右腕」

「まずまずの仕上がりだ」

そう言う割には少し辛そうである。椅子に深く凭れ目を閉じている彼の眉間に、僅かにしわが寄っている。痛みがあるに違いない。

ラデイスは詐欺師で腹黒い。だけど、いつだって真剣に相手に向かってゆく。

「ラデイス」

「ん」

「あんたってすごいや」

「……当たり前な事を言うな」

ラインはくすりと微笑んだ。

007・5（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
今回こんな中途半端な回を作ってしまった。
どうにも入れ込む事が出来ず、しかし必要だと判断しての0・5話。
どないやねん。

多々お見苦しい点あるかと思えます。すみません。

残すところあと六話。立ち寄ってくださる方々に、深く感謝を。

大学校の巨大な門扉。完璧に磨き上げられた石の廊下を歩き、十ナルグ（＝十メートル）でもきかない程の大きな出入り口の前に佇む青年を見つけ、リインは笑顔になった。

「ルセロ！」

やって来たリインに気付いてルセロが片手を上げて笑顔を返してくれた。昨日の来客は彼だったようだ。隣にはラディスとシモンもいた。

「やありイン。久しぶりだね。元気そうで良かった」

昼下がりの陽光に透けるブラウンの短髪に白い肌。自分と同じ、赤茶の瞳。今ではその血が絶えようとしている希少な種族。このレ―ヌの首都で暮らしているイリアス族の一人だ。

「ルセロ……その格好って」

彼は大学校の制服を着ていた。ルセロはリインと握手を交わして微笑む。

「そう。この年でなんだけど、大学校に入学したんだよ」
「本当!？」

「うん。リイン、君のおかげだよ。君はやっぱりシルヴィとティルガの子だ。僕らイリアス族の、大事な娘。運命の子。ありがとう……」

ルキリア国内で発令されていた警戒令の影響力は、一国だけにはとどまらず、その威力は全世界に及んでいた。イリアス族の人々はその警戒令の元、常に監視され身元調査や届けを出さなければどこに行く事も許されずにいた。就ける職業も制限され通常の教育を受ける事すら出来なかつたのだ。

人としての権利を脅かす元凶であった警戒令が取り下げられた今、やっと真の自由を手に入れたと言って良い。これでやっと、他の種族の者達と同等の権利を得る事が出来た。

ラインの父母が命をかけて勝ち取った奴隷解放宣言から、十八年もの歳月が流れていた。

「それ、道場の道着かい？ 凜々しいね。似合ってる」

「あは。ありがとう」

道着姿を褒められて、曖昧に笑みを返した。にこにここと微笑むルセロを見て、何故だかエンポリオを思い出す。彼の柔和で中性的な雰囲気がかきつと似ているのだろう。

「ラデイス。ラインをプルトの丘へ案内してあげたいんだけど、良いかな？」

しん、と沈黙が降りる。ラインは不思議に思いラデイスを見上げた。彼が相手の言葉に対して何らかの返答をしないのは珍しい事だからだ。ゆるくくせのある薄茶色の髪に、黒の眼帯。すつきりとした顎。

「ラデイス？」

ラデイスは無表情のまま腕組みをしてルセロを見据えている。するとぶつと吹き出して、ルセロが笑い出した。

「あつははは！　だ、大丈夫だよ。もうリインをどうこうするつもりはない。分かるだろう？　ははっ」

「そう何度も骨を折られるのはさすがにしんどいからな」

意味が分からず、二人の顔を交互に眺める。

「何？」

「いいんだよ、リインは気にしなくって。彼、何だか前に会った時より素直な反応をするね」

「ええ？」

「僕に聞かなくても、嘘を言ってるかどうかなんてあなたにならすぐに見抜けるはずだろう？」

「ああ。だが、人には気が変わるって事がある」

「ぷっ……くく。そうか、なるほどね。僕は今のあなたの方が好きだな」

「そりゃあどうも」

「ふふ……」

今度は後ろに控えていたシモンが笑い出した。ラデイスが彼にじとっとした視線を向けると、すぐに笑いを引っ込めて恐縮し、頭を垂れた。

「す、すみません。つい」

「アミル。お前これが見たくてここに残ったのか。悪趣味な奴だな」

リインはまた訳が分からなくなり、眉根を寄せる。

「ラデイス。名前間違えてんじゃないの？　シモンだろ？」

「いや。こいつはアミルだ。アミルヴェラ・ガルトナー。シモン・

ガルトナーとは双子だ」

「えっ」

驚いて、シモンだと思っていたアミルヴェラという名の青年を見つめる。黒髪の青年は鮮やかな緑の瞳をまん丸にして、言葉を失くして長身のラデイスを見上げていた。

「……驚いた。シモンが言っていた事は本当だったんですね。先生、私とシモンの区別が？」

ラデイスが自分の右目の下にとん、と指を置く。

「シモンにはうつすらだが、ここにほくろがある」

「そんな。あんな薄いシミに気付くなんて」

「それにお前とシモンは全く性格が違う。演じているのがばればれだぞ」

アミルヴェラは俯いて、くつくつと笑い出した。片手で拳を作つて口元に当てる。そこでやっとラインにも合点がいった。昨日、大学の廊下で出会ったのはシモンではなく、この人物だったのか。まさか双子だとは思わなかった。だって二人は本当にそっくりなのだ。

「これはすごい。私とシモンの区別がつくのは、ここではシャウナールズ様だけだったのに。テンペイジ議長だって、私達の入れ替わりには気付いていないんですよ？」

確かに、私はアミルヴェラです。私の双子の弟、シモンは本当は研究員なんです」

そこへ、アミルヴェラとまったく瓜二つの青年が廊下を歩いてや

つて来た。眉を下げても恐縮している様子の彼は、研究員としての装いをしている。アミルヴェラの隣に並ぶとまるで鏡か分身のように見えてしまう。それ程に二人はよく似ていた。背丈や体格も全く同じに見える。別人だと言われてよくよく観察すれば、シモンの方がやや痩せているようにも感じるが、僅かな誤差程度。これは見事だ。

リインはあんぐりと口を開いて二人を凝視したまま固まった。アミルヴェラがちらりと双子の弟に視線を投げて続ける。

「だから彼がこの黒の制服を着る事はないんです。同僚達は私達の着ている制服で、私達を見分けています。研究員の丈の長い服を羽織っているのがシモン、黒地に金の線が入った制服を着ているのがアミル、という風にね。時々入れ替わってお互いの仕事をしています。周囲にはばれていないのだから、仕事も演技も完璧なはず。弟は演技なんて出来ませんから、私がシモンを真似るんですが、それには自信があるんです。同僚達は私達を大人しく控えめな双子の兄弟と思っているでしょう。」

……だから驚いたんですよ。黒の制服を着ているシモンに、きちんとその名を呼んだあなたに」

「黙っていてすみません、ラデイス先生」

「ふふ。驚かせてごめんよ」

シモンがラデイスに向かって深々と頭を垂れ、アミルヴェラはリインの顎に手を添えて、開きっぱなしのリインの口を閉じた。

「なるほどな。確かに二つの仕事を完璧にこなすのは素晴らしい才能だ。こんな面倒な事をしているのは未来を見据えての事か」

ラデイスの言葉にシモンとアミルヴェラは同時に彼を見上げた。動きも連動しているみたいに一緒だ。ラデイスは口角を持ち上げて

微笑を浮かべ、続ける。

「未来の女帝候補と言つべきかな。アミルヴェラ」

一拍置いて、またしてもリインの顎がぐくと落ちた。

「……そこまで見抜いていましたか。この一瞬で？」

「俺は医者だぜ。そういうのは身なりだけでは隠せないもんなんだ」

女性だったのか。アミルは。

人の事は言えないが、あらためてまじまじとアミルヴェラを見つめる。黒の短髪にくりっとした緑の瞳。背筋の伸びた姿勢で黒の制服を着こなす彼女はやはり、青年にしか見えない。

「全く。シャウナの奴はどうしてこうも癖のある者を集めたがるのか」

「あなたはやはり、噂に違わぬお人のようです。とても面白い」

「もう一つ。お前達の入替えにテンペイジが気付いていないと思つていたか？」

「え？」

またしてもシモンとアミルヴェラが同時に声を上げた。あまりに同調している為に、二人の声が一人分にしか聞こえなかった。

「あの人は忙しいからな。お前達のゲームに付き合ってる暇はないんだ。気付いていないふりをしているんだよ。入れ替わろうが仕事完璧ならば支障はないだろう？ だからだ」

双子はゆっくりと顔を見合わせ、そしてまたラディスに視線を戻す。

「そうだったんですか……」

ぴったりと重なる二人の声。

「お前達の上司は一筋縄ではいかんぞ。良く勉強するといい。……もう時間だ」

ラデイスは静かに経緯を見守っていたルセロに視線を合わせ、

「日暮れまでだ」

と言い置いて、双子を連れて大学校の廊下の先へ消えて行った。長身の背を見送るラインの肩にルセロがそつと手を添える。

「彼っていつも忙しそうだね」

「うん」

「どこに行っても人を魅了する」

「うん。……詐欺師になったら荒稼ぎ出来る」

「ああ、本当だ。じゃあ行こうか。日暮れまでに君を返さないと殺される」

ルセロがラインに笑いかけ、二人は大学校を後にした。

「実はね、レドナも大学校に来ているんだ。今はラデイス達との会議に出席しているんじゃないかな」

「レドナが？」

道すがら、ルセロが語り出した。

「そう。君とラデイスが 厳然たる弾劾者 としてシャウナルーズ様の元についた事が関係してる」

「え……」

「ラデイスは嘘つきだよ。君を護ると言ったのに、君を危ない目ばかり遭わせようとする」

民家の統一された赤色の屋根と木々の緑。坂道を上って角を曲がり、小川に渡された橋を渡る。リインは愕然として橋の中央で立ち止まった。先を歩くルセロが気付き、優しく微笑んでリインの小さな手を取った。今気付いた。彼の腕には自分と同じ、漆黒のプレスレットが嵌まっている。

「ルセロ、違うんだ。僕が望んだんだ。僕が、ラデイスの護衛だから」

「それも分かってる」

「ルセロ……」

腕を引つ張られるようにして歩き、ルセロを見つめる。何と云ったらちゃんと彼に伝わるのか分からず弱り果てて、てくてくと歩いた。

「リイン。イリアス族がどうして特定の国や土地を持たず流浪の民となったのかは知っているよね」

「うん」

「リインのお陰で僕達はやっと人として認められた。だけどこの先も、僕達はどの国にも属さない。孤高を貫く。それが、イリアス族の生き方だ。どうしてか分かるかい？」

ルセロの穏やかな赤茶の瞳がリインに向けられる。

「イリアス族の『力』は脅威だ。どこか一国に属してこの『力』を行使する事になれば、おそらくはその国が世界最強になるだろうね」
「あ……」

とくりと心臓が脈打つ。イリアス族の『力』。僕らの持つ『力』は確かに、恐ろしい程に強大なものだ。手を触れなくとも念じるだけで、あらゆるものに影響を及ぼす事が出来る。壊す事が出来る。その対象が人であろうとそれは変わらない。イグルよりも強い威力と実行力のある、脅威の兵器になるだろう。

「僕達はレーヌ国で暮らしているけれど、それも全て契約を交わしているんだ。イリアス族を、イリアス族の持つ『力』の事を深く理解して、正しく認識してくれているこの国の女王陛下の元だからこそ、僕達はここに留まる事が出来る。……僕達は関わりすぎてはいけない。影響を及ぼしすぎてはいけない。辛い状況であつてもこれは貫かなければならないルールだ。誰かを護る為だけに、僕達は『力』を使う。その時にだつて相手の命までも奪う事はしない。振りかかる火の粉を払うだけ。リイン、君もそうやって護衛をつとめているはずだ。」

「だからもしこの『力』を悪用するような同族が現れた時には、僕らは命をかけて、それを阻止しなければならぬ」

高潔なる自由の民。虐げられてきた永い歴史から解放されると、貫かなければならない立ち位置が忽然と姿をあらわした。皮肉にも確固たる権利を得る事によってそれは動き始めた。何と過酷な運命だろうか……。

「君がラディスの護衛なのは知ってるし、君が『力』を使うのはラディスの為だけだと分かってる。だけど今回、レーヌ国の中枢に限りなく近い所に属する事になるんだ。レドナはそれを心配してる。

……彼が何も考えていないとは思わないけどね」

着いたよ、とルセロがにっこりと微笑んだ。

鮮やかな青色。真つ青な海がそこに存在しているかのような。高い丘の一面に、アグデント草の青い花が咲き誇っていた。地平線を挟んで、空の青と丘の青が美しい対比を見せている。幻想的な風景。

ルセロもこの景色がとても気に入っていた。レーヌの首都にやって来てこの丘の存在を知り、ここに来て良かったと心底思った程だ。ラインが慎重に足を踏み入れて、うわあ、と歓声を上げた。

「すごい！ 海の中にいるみたいだっ」

興奮で頬を紅潮させながらこちらを振り返る。ラインの素直な反応に、自然と笑みがこぼれた。ルセロはゆっくりとラインの隣に並ぶ。

「ここはブルトの丘といってね。イグルの特効薬を作る時に必要な、

アグデント草を栽培している所なんだ。今がちょうど見頃の時期だよ。綺麗だろう?」

「うん！　綺麗だ！　僕、こんな景色初めて見た」

感動して呟くリインの、栗色の小さな頭に視線を落とす。柔らかな髪に真っ白で細い首筋。華奢な肩……。まるで繊細なガラス細工のようだ。しかしその内面には熱い心と折れぬ意思、底知れぬ力を秘めている。真っ直ぐで素直な心は接するだけでほっとしてしまう。不思議な娘。大事な、娘……。

あ、とリインがその場にしゃがみ込んだ。

こんなに大事な君をどうして危険な場所へと送り出す事が出来るだろう。

どう考えても分からない。ラデイスは何故、リインをそんな場所へ連れてゆこうとするのだろう。愛しい人を。かけがえのない、大切な女性を。

彼には臆する心はないのだろうか……。

「ねえリイン。やっぱり僕達とここで一緒に暮さないかい？　君がいてくれたら皆がどんなに喜ぶか。君にとってもそれが一番良いと思うんだ。僕は今でもそう思ってる。……それに」

ルセロは刹那、瞳を閉じて息を止めた。それから意を決したように深々と息を吐き出す。

「それに初めて会った時から、僕は君の事が……」

「すごい……。この花、ラデイスの目の色と同じだ」

「……………へ?」

ほら、と言ってリインがきらきら輝く瞳で見上げてくる。呆然と

しながらも隣にしゃがみ込んで、目の前の花に視線を向けた。真っ青な五枚の花弁。その中央には黄色い花粉を含んだ薬やくが集まっている。言われてみれば確かに、ルキリア皇族の黄金の青い目の構造と似ているが……。

ルセロは途端に気抜けてしまい、苦笑をもらした。

「お土産に持って帰ったら？」

「摘んじゃ悪いよ」

「大丈夫。これだけあるんだから」

「そっか」

「リイン」

名を呼んでリインの赤茶の瞳を見つめる。力のある光を宿している。綺麗だ、と思う。

「君の世界はラデイスを中心に回っているんだね」

リインの全てが彼なしではあり得ない。そんな単純な事をすっかり忘れていた。いや、そうだと思いたくなかった、の間違いか。

白く透き通るようなリインの頬が赤く染まってゆく。ルセロはそれを眺めながら、ラデイスの事を呪ってやりたい程に憎たらしく思った。

それから丘の頂きにある長椅子に腰かけて、色々な事を語り合った。リインは良く笑い、話し、ルキリア国の帝都ベイルナグルの診療所で暮らした日々をとてもしそうに語った。たくさんの優しい人々に囲まれていたようで、ほっとする。彼の周りに心あたたかな人々がいる事に、ルセロは納得した。

これがリインの選んだ男性。それでこそ僕らが認めた人物。僕らの大事なリインを、預けた男だ。……気に食わないけど。

「リイン！」

振り返ると、レドナが片手を振ってこちらに歩いてくるのが見えた。白のブラウスに薄桃のスカート、茶の巻き髪が軽やかに揺れている。

「レドナ！」

リインとレドナは固く抱き合い、顔を見合わせて笑った。

「まあ元気そうね。良かった」

「レドナは？」

「私もとっても元気よ」

「会議は終わったの？」

ルセロの問いかけに、レドナはええ、とふつくらとした頬に微笑を浮かべた。彼女はこのレーヌ国で暮らしているイリアス族をまとめる家長で、現在では珍しい成人したイリアス族の女性である。

「じゃあそろそろ帰らないとね。ラディスが乗り込んでくるかも知れない」

イリアス族の三人は、穏やかに笑い合った。

「レドナ、ルセロ。どうもありがとう」

大学校の入り口まで戻って来て、リインが二人に真剣なまなざしを向けた。

「良く分かったよ。イリアス族としてどうあるべきか。僕はきつと、その覚悟が出来る。僕はこの先も絶対に、ラデイスを護る為にこの『力』を使うよ。だってこの『力』はラデイスのものだから……。だから僕が彼の護衛としてついてゆく事を認めて欲しい。僕を信じたいんだ」

「リイン……」

「ええ、リイン。分かっています。あなたと彼との絆は、何よりも深く固いものだわ。私達がどうこう出来るものではないもの。リイン、あなたを信じます」

「ありがとうございます」

「でもね、これだけは覚えていて？ 私達は何があってもあなたの味方よ。私達は家族ですもの」

「レドナ……ありがとうございます」

「私達の可愛い娘。あなたはあなたの思う道を、真っ直ぐに歩んでゆきなさい。どんなに困難でも、あなたにはそれが出来るわ」

小さな背中が大学校の校舎の中へと消えた後も、レドナとルセロはしばらくその場所で佇んでいた。

レドナはおもむろに腕を組み、盛大なため息をつく。

「もっつ。ルセロったら！ 告白はどうしちゃったのよ！？ あなた、リインに愛を告げてここに引き止めて見せるって言ってなかったかしら？」

対するルセロも首を振りつつ、大きく息を吐き出して口を開いた。

「そっついうレドナこそ。今度こそラデイスにがつんと言って、リインを彼から引き離すって言ったのに。その様子じゃ、やっぱりま

た彼に言いくるめられてしまったんだろう？」

二人はぎゅっと睨み合い、同時に吹き出して声を上げて笑った。

「女はね、格好良くて優しくて、素敵な男性には弱いものよ。仕方ないわ」

「男だって、本当は臆病者さ。大事な時には二の足を踏んでしまう」

お互いの肩を叩き合い、夕日が照らす石畳の道を、仲間達の待つ我が家へと帰っていった。

そつと木目の扉を開く。部屋にあるテーブルの上には無造作に書物や資料が積み上がり、床の上に丸めた紙クズがいくつか散らばっていた。とうとうこの部屋にも仕事を持ち込んで片付けているようだ。肘掛に肘を乗せて両手を組み、椅子に深く凭れて目を閉じているラティスがいる。黒の立襟のボタンを首元まで開けて着崩した格好。左目は黒い眼帯で覆われているが、黙したその表情はまるで彫像のような秀麗さだ。

ラインが近づいてゆくと、ゆっくりと右目が開かれて青い瞳がこちらを見上げた。寝ていたわけではなく、考え事をしていたようだった。

「何考えてたの？」

「俺を早死にさせようとする女帝に、どうすれば一矢報いる事が出来るか」

笑いながら手に持っていた鮮やかな青色の花を、彼の耳に掛けて飾った。

涼やかな顔立ちと薄茶色の髪に青い花が良く似合っている。ラティスの肩に手を置いてラインは満足げに微笑んだ。

「やっぱり。似合うと思ったんだ。綺麗だ」

「こういうのは女性がするもんじゃないのか」

ラティスの腕が腰に回り引き寄せられ、青い瞳が見上げてくる。胸に温かな愛おしさが込み上げる。

「……ラティス」

「ん？」

「考えてる事、ちゃんと僕に言つてよ。僕なら大丈夫だから」

きつと、彼はずっと先の事までも思案している。それは自分達だけの事にとどまらない。あらゆる可能性を考えて、けれど一番に僕の事を思ってくれる。僕のしたいようにさせてくれる。ラデイスは優しい。

イリアス族でそのうえ女性で、禁忌の『力』を持つ自分。あげく彼の護衛としてついてゆくと行ってきかない自分。ラデイスにとつたら僕が傍にいる事の方が、色々と大変なのかもしれない。僕はわがままで。

彼が低く笑った。

「……そうか。お前に口付けたい。お前に触れたい。リン、お前を抱きたい」

瞬間に、かっと顔が熱くなる。

「ち、違つたろ……そういう事じゃなくって……」

リンは横を向いて彼の膝の上にちょこんと腰かけ、口をとがらせた。ラデイスはまだ楽しそうに笑っている。完全にかかわれている。……分かつてるくせに。

「あんた、ほんとにいじわるだな」

「安心しろ。お前を蚊帳の外に置くつもりはないよ。明日は 厳然たる弾劾者 の詰め会議だ。それにはお前も参加する」

「うん。あのさ、僕とラデイスって目立ちすぎないかな」

厳然たる弾劾者 として世界に散っているリリーネ・シルラの

使徒たる医者や聖職者達に出会わなければならない。速やかに世界中を旅して土地から土地へ渡っていかなければならぬだろう。しかし自分は紅い目と白い肌を持ったイリアス族で、ラデイスはルキリア皇族の 黄金の青い目 を持っている。それだけで行く先々で何か問題が起こりはしないか少し不安だ。

「イリアス族だルキリア皇族だと言っても、噂程度に耳にするだけで実物を見る機会のない者達の方が多い。それに目立つくらいで良いんだ。俺達は広告塔みたいなもんだからな」

「ふうん」

「この壮大な計画は今始まったばかりだ。既に 早馬 で通達はされているが、浸透するには時間がかかるだろう。人々の認知度を高める為にも世界に向けて発信する必要がある。俺とお前は 厳然たる弾劾者 の顔になるんだ。」

だからこそ、何があっても負けられない。崩れる事は許されない」
すぐ傍にある彼の顔を見つめる。ラデイスの真剣なまなざしがリインを真つ直ぐに射抜いた。

「この先にどんな問題や弊害が起こるのか誰にも分からない。全く手つかずの荒野に道を切り開いてゆく。……俺とお前で」

道を作つてゆく。僕とラデイスで。

「しかしあくまでも俺は医師として、お前は俺の護衛として仕事をする。戦いに行くわけじゃない。出来る限り戦闘は避けたい。止むを得ず剣を抜く場合があるとしても、最小限で最大の効果が残るよううにしてみせる」

ラデイスの低く澄んだ声から静かな決意と強い意思を感じる。青

瞳は揺るぎない力に満ちている。

後に続く者の為に、医療を待つ者の為に、命をかける覚悟があるか。ゼロから全てを作り上げる。

彼の進む道に、楽な方途は存在しない。

リンの赤茶の瞳に強い決意の炎が宿る。

「ラデイス。僕はあんたを護るよ。あんたを護るのは僕だ。……だから、ちゃんと僕を使つてよ」

そう告げると、ラデイスは口元に笑みを浮かべ俯いた。

「お前の『力』はきつと役に立つ。驚くくらいにな」

「ほんと?」

「ああ」

彼にそう言われると途端に誇らしく思えるのが不思議だ。

「全く……困つたもんだ。お前が何の力もない、ただ護られているだけの女なら良かった」

どきりとする。やっぱり僕が重荷なのだろうか。もどかしい思いで彼の長い睫毛を見つめる。

「ラデイス……」

ラデイス。

僕はきつとあんたの役に立つよ。もつとつんと強くなるから。絶対に足手まといになんかならないようにするから。

だから、お願いだから、僕を傍に置いて。

「お前がこの上なく頼りになるもんだから、俺はお前に甘えてしま
う」

「……え」

顔を上げたラデイスと視線がぶつかる。彼はリインを見つめ、弱々しく笑った。胸が熱くなる。

「ほ、ほんと？ 僕は頼りになる？ あんたの？」

「ああ」

嬉しい。良かった。口元がゆるんでしまう。

「しかしいつまでもだらだらと続けるつもりもない。過酷だが、短期間の内に仕上げるつもりだ」

「うん」

「一番状況の悪化が激しい場所から始める。一番、厳しい道を選ぶ」

「うん。分かった」

「きついで」

「分かってる」

ラデイスの長い指がリインの顎にかかり、鼻先が触れ、唇を塞がれた。優しく深い口付けだった。

「ん……」

ゆっくりと探るように確かめるように中を這い、舌が絡み、奪われる。じわじわと熱が生まれ、その口付けに夢中になってしまいそうになる。全身の力が抜けてゆき頭の中が真っ白になる。身体の奥

が震えて、愛おしさに胸を焦がす。

「……………んっ……………はあ」

ぎゅっと服を掴み、俯いて何とか息をついた。彼の優しい匂いに包まれる。視線を感じて顔を上げる事が出来ない。

「……………リン」

耳元で低く囁かれ、リンは震えて固く目を閉じた。鼓動が速くなる。息が上がる。彼の吐息がかかるだけで身体が反応してしまう。ラデイスはいつも簡単に、やすやすと、僕の理性を奪ってゆく。

「あ、ル、ルセロがねっ」

「……………ルセロ？」

「今度また家に遊びにおいでって」

「そうか」

俯いたままのリンの髪にラデイスの口付けが落ちる。リンは必死に言葉を紡いだ。

「あ、あの、プルトの丘っ。すっごく綺麗だったよ」

「それは、良かったな」

彼の指先が頬をなぞる。リンが距離をとろうと片手でラデイスの胸を押し返すと、腰に回った腕に力がこもり、より強く引き寄せられた。リンの頬をなでていた指先が顎を伝い、首筋へと落ちる。リンはこれ以上ない程に赤面し、頑なに俯いて抵抗した。

「あ……………ルセロってね、ちゃんと試験で受かって大学校に入ったん

だって。す、すごいね」

ラデイスがリインの鎖骨に指を這わせ、静かに呟いた。

「お前は どうして そう簡単に、人になつくんだろうな」

「……え？」

「あいつがお前の事をどう思っているのかも知らずに、な……」

意味が分からず、思わず顔を上げた。息が止まりそうな程近くにラデイスの整った顔が迫り、視線が絡む。彼は吐息まじりに囁いた。

「あいつの話はもう良いよ」

唇が重なり、緩く噛みつかれ、リインの心臓が、どくん、と脈打った。

ああ……気を失いそうだ。耐えきれず吐息がこぼれる。ふわりと身体が浮いた。ベッドへ向かっているのに気付き、少し慌てる。

「ラデイス……あ、あんた何か、野獣みたい」

ベッドの上に降ろされ、迫ってくるラデイスの肩を両手で押し返した。彼は何も言わず真っ直ぐに見つめてくる。青い瞳の奥の金色が少し潤んでいるように見え、彼の色気に酔ってしまいそうになる。青い花がぼとりとベッドの上に落ちた。ラデイスはそれを拾い上げ、リインの栗色の髪を梳いて耳元に飾った。

「お前の方が、良く似合う」

そう言って柔らかく微笑んだ。全身が痺れてしまったみたいにかが入らなくなり、彼から視線が外せなくなる。自分の腕力は強い方

なのに何故だかラデイスにはそれがうまく発揮出来ない。彼の両手がラインの頬を包み、優しいキスが落ちる。口付けはすぐに深いものへと変わり、追い込まれ、与えられる情熱に翻弄される。リインは身じろいでぎゅうとラデイスの服を掴んだ。口付けながら彼の指先がラインの素肌を探り、伝う。熱い……。

「ん、うっ……ッラ、ラデイス……あっ……」

僅かに離れた隙間から喘ぐように空気を求める。彼の色づいた吐息が聞こえ、ラインの身体がざわりと反応する。ぎゅっと目を閉じた。

「リイン……いやか？」

耳元で囁かれおそろおそろ目を開けると、ラデイスの顔がすぐ近くにあった。切なそうに眉を寄せている。直視出来ず顔をそらした。僕がいつも抵抗するから、本当は嫌がっていると、そう感じたんだろうか。ちゃんと伝えなくては。でも、ものすごくときどきして、心臓が弾けてしまいそうだ。

「そ、んなの……い、いやな訳、ない……だろ」

顔を横にそらしたままリインは消え入りそうな声で言った。恥ずかしくて死にそうになる。頬に口付けられ、またぎゅっと目をつぶった。

いやな訳ないじゃないか。

「……本当に？」

「ん……こ、こんな事……ラデイスとじゃなきゃ、いやだよ。僕、

だって、ぼく……」

「ラデイスが好きだ。こんなにも愛おしい。」

彼の指先がゆっくりと素肌を伝い、リインは震えて吐息をこぼす。

「だって……？」

そこではっとした。彼の意図に気がついて、めまいを起こしそう
な程恥ずかしくなり、間近にある美しい顔をきつく睨みつける。

「……おい。何を言わずつもりだよ。僕を苛めて、そんなに楽しい
か」

ラデイスがにやりと笑った。

「惜しい。もう少し楽しみたかった」

むっとしてラデイスの顔をがしりと両手で挟む。少し考えれば分
かる事だった。今までさんざん好き勝手僕にしといて、今更しおら
しく聞いてくるなんて。

リインは首元まで真っ赤になりながら、ラデイスの頬をぐいぐい
と両手で押しつぶした。

「怒るぞっ」

「てて。お前がルセロの話ばかりするから……ついな」

一瞬、耳を疑った。

「なに……今なんて」

青い瞳がじっと見返してくる。
まさか。

「妬いてるの？」

「ああ……おかげで会議どころじゃなかった」

少し拗ねたような声音に、胸が高鳴ってしまふ。僕って馬鹿だ。
たった一言がこんなに嬉しい。

ラインの細い指が黒い眼帯に触れ、そっとそれを外した。綺麗な
瞳がラインを見つめている。

「ラデイス……」

胸が締めつけられて息が苦しい。声が震える。

「……僕が、好き？」

「ああ。好きだ」

泣いてしまいそうだ。

「僕が……欲しい？」

ラデイスが大きく息をついて笑った。

「お前もなかなか良い性格をしてる」

「だ、だって」

「ああ。欲しいよ。そんな風に見つめられたらたまらなくなる。俺
はお前が欲しい。欲しくて仕方ない。

ライン……愛してる」

ラインの頬に涙が伝った。腕を伸ばし彼を引き寄せ、ぎゅっと抱き締める。鼓動が重なる。

「ラデイス」

ああ……ラデイス。

彼はこの先が困難である事を予測している。女王陛下の部下として、厳然たる弾劾者として一度動き出してしまうと、決して負ける事が許されない旅が続くのだ。判断を間違えれば取り返しのつかない事になる。一時も油断出来ない。

ラデイスの背負うものはいつも大きくて、重要で、過酷だ。

でも僕がいる。大丈夫。僕が、あなたの傍にいる。ラデイスを護るよ。

「ラデイス……ぼく、つぼくも……」

あなたを一人になんかしない。一緒に行こう。

茨の道を。

夜の静寂をついて、高い金属音が軽やかに響いた。剣を交える二人の動きはまるで定められた演武を踊っているように美しく、無駄がない。研ぎ澄まされている。

「ま、待て待て」

はっと我にかえって目の前のラディスを見やる。剣を持つ彼の右腕が力無く垂れさがっており、左手でかばうように押さえていた。月明かりの落ちる芝生の上で、せいぜいと肩で息をする。

「もう限界だ。痺れて動かん」

彼の右手からあの名剣が、音もなく芝の上に落下した。薄暗い視界の中で目を凝らして見つめると、ラディスの右腕が小刻みに震えているのが分かった。ロジエルは途端にしゅんとして、構えていた剣をゆっくりと下ろした。

「……ごめん」

無意識に言葉が口からこぼれる。あまりの楽しさにまた夢中になっってしまった。何でだろう。どうしてだろう。

言い表す事の出来ない感情がロジエルの胸を満たしていった。

怪我を負う以前はきつともっと強かったんだ。

怪我さえなかったらラディスは今よりも凄くて、ずっと強いままだったのに。

「何でだよ」

何に對してかは分からないが、憤りを感じて呟いた。

ラデイスは朗らかに笑い、右腕を押さえたまま芝の上に腰を下ろす。

「お前の相手が出来ないのは申し訳ないが、俺は後悔してないよ。右腕が無くなるのが構わなかったからな。それよりもっと大事なものがあつた」

「分かんないよ」

「意外に剣の腕なんて、役に立たないという事だ」

ロジエルは僅かにむっとしつっ、どすんと胡坐をかいて座つた。

「じゃあ俺のやつてる事は無意味なのかよ」

「使い方次第だ。本当の強さつてのは剣術では計れないもんなんだぜ」

「そんなの分かつてるよ」

「ああ。そうだったな。お前は賢いし大人だ」

「……そんな事ない」

「いいや。お前は相手の視線や口調で、気持ちを読み取る事が出来る。自分を避けようとする人間に敏感に反応する。分かつてるよ。向こうが先に壁を作るんだ。お前はそれに気付いてしまつ」

ラデイスの言葉に驚き、それからぎゅうと心が痛んだ。息がつかまる。鼻がつんとして、自分が涙ぐんでいるのが分かつた。暗闇に揺れる緑の芝をじつと睨みつけ、かすかに震えながら大きく深呼吸を繰り返す。ここにいた。

自分の事を知ってくれている人が、ここにいた……。

「俺は……臆病だ……」
「繊細なんだよ」

ゆるやかな風が吹いて髪を揺らした。心地の良い風に吹かれ、二人は無言で夜空を見上げる。強い光を放つ月が薄い雲に隠れると、小さな星達が姿を現し無数に瞬く。深い紺色に広がる、煌めく銀の砂粒。

「剣術以外の事も勉強すると良い。きつと役に立つ」

「あんたの子供の頃ってどんなだったの？」

「それはそれは聡明で美しかった」

「ふん。だろうね」

「だが生意気で可愛げのないガキだった。だいたいの所で嫌われた」
「……だろうね」

ロジエルがぼつぼつと、とりとめのない質問をして、ラデイスはそれに淡々と答えていった。彼の言葉は簡潔で分かりやすく、ごまかしたり子供扱いするような事は言わなかった。真つ直ぐに答えが返って来た。

「あんたさ、最初に思いつきり俺を負かして、その後俺がグレたらどうするつもりだったの」

「そんな事にはならないよ。お前が来なかったらこっちから行くつもりでいた」

「へえ」

「それにお前はずっと悩み続けていただろう。答えを探し続けていただろう？ 必死にもがいていた。だから俺は安心してお前を叩きのめした」

静かに語る落ち着いた声が、ロジエルにはひどく心地良く聞こえ

た。心の隅っこでずっとひっかかっていた塊がころりとれたような気がした。こんな気持ちはいつ以来だろうか。自然で平静で、安心して自分を休ませる事が出来る。家族三人で暮らしていたあの頃。環境は最悪でも、父さんと母さんが傍にいてくれた、あの頃。

会話が途切れ静寂が訪れた。闇夜に響く虫の音に、耳を澄ます。

「……俺の父さんは国を出る時に見つかって、捕まったんだ。俺と母さんに、逃げろって言ったんだ。俺は父さんって叫んだ。一緒に行こうよって。だけど父さんはとっても恐い顔をして、先に行けて怒鳴った。母さんは俺の腕をものすごい力で引っ張った。腕が抜けてしまうかと思っただんだ……」

ぼやぼやと星空が滲んでゆく。

「どうして俺、ロガートに生まれたんだろう。ロガート族にしてくれて頼んだわけじゃないのに」

この世界は、とても不公平だ。

ロガートに生まれなかったら、ロガート族じゃなかったら、今だって父さんはここにいた。たとえばザイナスで生まれたアルム族だったら、今だって家族三人で暮らしていたかも知れない。

どうして自分には父さんがいなくて、どこに行っても居場所がないんだろう。

「そうか。大変だったな。お互い厳しい時代に生まれたもんだ」

さらりとラディスが言って、俯いたロジエルの小さな頭にぼんと手を置いた。何の思い入れもないような言葉だったのに、それを聞いて涙が出た。大きな手の温かみに、また涙が流れた。ぼんぼんと

撫でられ、その手はゆっくりと離れていった。

上を向いて素早く涙を拭い鼻をすする。泣いているのが恥ずかしくて、言葉を続けた。

「こ、ここに来れば、ベレンダイ先生に会えると思ってたんだ」

「ベレンダイが何故死んだか知ってるか？」

「イグルに襲われそうになった子供を助ける為に、自分の身体を楯にして戦ったって。英雄の偉大な死だったって師範が言ってた」

視線を感じて顔を向けると、ラデイスがロジエルを見つめてにいと笑った。眼帯も眼鏡もしていない左目は、右目よりも闇を多く含んでいるように見える。

「それは嘘だ」

「えっ!？」

「ベレンダイは無類の酒好きでな、朝まで酒盛りなんてしょっちゅうだった。その日もたらふく好きな酒を飲んで、良い気分であらふら歩いてた。それで足を滑らせて転んで、打ちどころが悪くてぽっくりだ」

ロジエルはじとつとラデイスを睨みつける。

「そんなの信じるかよ」

「あんまりな死に方だったからな、格好つかんだらう？ だから弟子達がでっち上げたんだ」

「嘘だっ」

ラデイスがくくく、と笑った。

「俺の剣術の師はベレンダイだが、実はまともに稽古をつけてもら

った事は数える程しかない」

「はあッ!？」

「道場の師範達に剣術を学んだ。俺がいた頃には既に、ベレンダイは単なる酒好きの親父だったよ。だから俺はあそこの師範達が今でも苦手だ」

ロジエルは口を開けて絶句した。

「そ、そんな……」

「なあロジエル。世界は広いぞ。通り一遍で分かったような顔をしていたら恥をかく。実際の経験に勝るものはないんだ。道場に通えよ。基本も学べるしそれが一番の近道だ」

シヨックから覚めきれない状態のままラデイスを見つめる。

「人の噂や評価なんて気にしていたらきりが無い。本当の中身は外からじゃ分からない。そうだろう?」

他の誰かがどうかじゃない。誰が何を言ったって関係ない。まず第一に、お前自身がどうしたいのかが重要なんだ」

ロジエルは二、三度、瞬きを繰り返した。

ああ、そうか。

風が吹いて芝がさわさわと音を奏で、ラデイスの髪がそれになびく。綺麗な顔がこつちを見ている。

ごまかしや嘘を、許さない瞳。全てを見抜く、青い瞳。

ロジエルの髪も風に揺れ、黒の瞳が月の光に反射して銀灰色に輝いた。

「お前は幸運の持ち主だ。ロガート族だからどうした。どんな種族だって、ここへ来るのには苦勞するんだぜ？　どんなに頑張ったって、誰にも気づかれずに終わる奴もいる。だがお前は女帝の目にとまった。お前の目の前には全てが用意されてる。それに手を伸ばすか伸ばさないかは、お前次第だ。人のせいにするなよ？　お前の、人生だ。」

それはお前の父親が、お前の為に残したものだ」

父さん。

俺……、俺。

俯くと目から涙が一粒、ぽとりと落ちていった。

「俺……母さんを安心させてあげたい。俺、シャウナルズ様のお役に立ちたい」

そう口に出して言葉にすると、身体の底から湧き上がるような力が生まれた。ロジエルは固く目を閉じて両手で握り拳を作り、口の中でまた唱えた。

母さんを安心させてあげたい。シャウナルズ様のお役に立ちたい。

「……見つけたな」

顔を上げるとラディスと目が合った。微笑んでいる。ロジエルはその顔を食い入るように見つめた。

「……え？」

「それが答えだ」

不思議と心は平静だった。

落ち着いてすんなりとラディスの言葉を聞いている自分が可笑しく思えてくる。今まで苛々していたのが馬鹿らしく思えてくる。そうか…… やつと、分かった。自分が何をしたかったのか。

「でも俺……」

「出来るよ。お前になら」

最後まで言い終わらないうちにラディスが答えた。少しむっとする。

「俺が何言うか分かってないくせに……」

「くく。そうか。それは悪かった」

そう言ってゆっくりと立ち上がり、うーん、と腰を伸ばす。ラディスは背が高い。俺もこんな風に大きくなれるだろうか。うらやましい。あんなに身長が高いと、そこから見える景色はどんなだろうか。やっぱり違って見えるんだろうか。見晴らしが良いんだろうか。

「ロジエル」

彼の低い声が、月明かりの落ちる空間に染みてゆく。ロジエルは目の前の高い背を見上げた。

「お前は、希望だ」

とくとくと、心臓が鳴る。

「種族の枠を超える。超える事が出来る。どんなに辛くても、全力

でシャウナを護ってみる」

その声音は直接に、心を掴んで命を揺さぶる。

「ロガート族の最初の一人として、お前が道を作るんだ。……俺は先に行って待つてる。必ず来いよ」

振り返ったラデイスの表情は、ロジエルからは影になって見えなかった。少年の小さな胸に嬉しさと奮い立つような力が込み上げる。こんなにすぐ近くに、目指すべきものがあつた。何て強い存在だろうか。

彼はおもむろに長身を折り曲げて自らの剣を拾い、それをロジエルに差し出した。

「何？」

「お前にやる」

「えッ！！　だ、だって、この剣……」

慌てて立ち上がって後ずさり、首を左右にぶんぶんと振った。こんな伝説の名剣を自分が持つなんて考えられない。

ラデイスはこんな宝のような大事な剣を、やる、のたったの二文字で手放そうとしている。何て奴だ。

「もう俺の腕では扱えないからな。持っけていても意味がないんだ」
「あ……」

何となく気の毒な気持ちになつておずおずと彼を見上げ、それから銀色に光る剣に視線を落とした。持ち手は控えめな黒に近い灰色で、柄頭にある結晶石がきらりと輝いている。両手をそろりと差し出すと、その上にぽんと置かれた。ずしりと重みが伝わる。右手に

持つてゆるく振るう。素晴らしい。その感触に感動して心が震えた。目の前にかざすと、月の光を反射させて閃く。刃こぼれ一つなく手入れが完璧に行き届いている。すらりとした刀身の先に、夜空を仰ぐラデイスが見えた。

「ほんとに……良いの？」

「それはお前が持つべきものだ。それに俺はもっと素晴らしい剣を手に入れた」

「そ、そうなの？」

「ああ。俺だけの、美しくしなやかで、何にも屈しない強い剣だ。

大事な……剣だ」

「すごい。今度俺にも見せてよ」

ゆつくりとロジエルを見下ろし、彼は目を細めて微笑む。その綺麗な顔にロジエルは息をするのを忘れそうになった。こんな美しい表情をする男の人が、この世にいるなんて思わなかった。

「ああ。そうだな。……だがもう目にしているかも知れんぞ？」

二人が出立する日が決まった。明日だ。

ロジエルは朝から気持ちが悪く落ちて込んで、ベッドからなかなか起き出せずにいた。今日は道場での稽古も休みの日だから寝坊しても大丈夫だ。けれどももう目が覚めてしまった。しびしび身体を起こすため息をつく。

二人が行ってしまう。ラディスとリインはシャウナルズ様からの命を受けて旅に出るのだ。自分はそれについていけない。連れて行って欲しいと思った事もあった。しかし今の自分に何ができるのだろう。二人には遠く及ばない程、自分には何もかも足りていないのだ。

遠く人の話し声がする。それからぱつと楽しげな笑い声が上がった。一つは母の声。この家で、こんなに楽しそうな声が聞こえるのは初めてかもしれない。ぼうつとする頭で考えつつ扉を開いた。

「あら。やっと起きたのねえ。おはようロジエル」

「稽古がないからってどんだけ寝るんだよ。もう昼前だよ」

テーブル席に母とリインが座っていた。ロジエルは内心で驚き、口元をむっと尖らせる。

「……………何でいるんだよ」

テーブルの上には質素な茶器と美味しそうなパイが乗っかっていて。このテーブルに、こんなに楽しそうなものが並んでいるのは初めてかもしれない。

「まあロジエルったら！ リインちゃんがね、パイを焼いて来てく

れたのよ！ とっても美味しいのよ。お料理が上手なのねえ」

母がにこにここと笑いながら説明をする。……ちゃんづけかよ。何だかちつとも似合っていない。

「ロジエル、顔洗って来いよ」

ラインが席を立った。今日はいつもの道着姿ではなく、白のブラウスに緑のベスト、細身の黒のズボンに茶革の長靴という格好だ。栗色の髪や真っ白の肌が陽に透けてとても壊れやすそうに感じる。

「手合わせしよう」

ラインがこつちを見ている。もろそうな容姿とは正反対の、意思の強い光を宿す赤茶の瞳。元氣な奴。

何で起きぬけにそんな事しなくちゃいけないんだよ、と言いたかったが、ロジエルは無言で洗面所に足を向けた。分かってる。これが最後の手合わせだ。ラインはわざわざ自分に会う為に来てくれたのだ。

「いってらっしゃい。怪我しないようにね」

上機嫌の母が手を振って送り出す。ラインとロジエルは片手にそれぞれ木剣を持って、家の裏手にある小さな原っぱへと向かった。

「母さんになつくなよ」

先を歩く細い背に声をかける。ラインは自分より四つ年上だが、背丈は自分とそんなに変わらない。ラインが足を止めくるりと振り返って、首を少し傾けて笑った。

「いいだろ、別に。ロジエルのお母さんって優しいね」

突然に理解した。

こいつはきつと自分が想像もつかないような大変な苦勞を乗り越えて、ここに立っている。

リインは最初から、自分に対してあの目つきをしなかった。他の皆が自分に向ける、怯えたような計るような視線だ。リインのまなざしは真っ直ぐで何も隠さないし、飾らない。それに痛みを知っている人間のそれだった。もう既にロジエルには分かっていた。リインは自分なんかよりも遥かに強い。実戦を経験した事がある者にしか身につかない強さを持っている。それに心も強くて、大きい。

俺は本当に、何にも知らなかった。

世界は、広い。

ロジエルは両手で木剣を構えた。

「俺、また強くなったんだ」

「知ってるよ。ラデイスに稽古つけてもらってたんだろ。僕なんか一度もしてもらった事ないのに」

むすつとしつっリインも構える。

「でも僕だって今日はほんとの本気だからな！」

ゆらりとリインの瞳の奥が揺れたように感じた。鮮やかな深紅の炎が宿る。見ると腕にはブレスレットがなかった。ロジエルは俄かに慌てる。

「ちよ、ちよつと！ 『力』を使うのは反則だろ！」
「勝負！」

有無を言わずに素早さが格段に増したリンが、ロジエルに斬り込んでいった。

ノックの音がして返事をする、扉が軽やかに開いた。現れた人物に心底驚くが顔には出さない。相手は室内にぐるりと視線を巡らせつつ、眉を上げた。

「まるで研究室のようだな」

書棚に向かっていたアミルヴェラは、顔だけを相手に向けてにっこりと微笑んだ。

「ええ。私もシモンも、こつこつという部屋の方が落ち着くんです。何か御用ですか？ ラデイス先生」

ラデイスが片手に持っていた数冊の書物を机の上に置く。

「前に言っていたモド先生の論文だ」

「すごい！ もう今では手に入らない本なのに」

感嘆の声を上げて、アミルヴェラは貴重な書物の表面をなでた。

「たまたま持ってきてたんだよ。本当は俺のもんじゃない。もう十年以上も借りっぱなしでな。……ん？ 何だ、シモンもいたのか」

書物と研究器具の山の奥で机にかじりついている双子の弟は、ぶつぶつと何事かを呟いて一心不乱にペンを走らせている。朝からずつとあのままだ。苦笑を浮かべ長身のラデイスを見上げる。

「彼があの状態の時は何を言っても反応しませんよ」

「学者肌だな。そっぴい最近は入れ替えをしていないらしいな」

「ええ。もう飽きましたから。私がこんな性格をしていたと知って同僚達は驚いています。ふふ……なかなか面白い反応が得られました。女性であるという事実はまだ少し伏せておこうと思っています」

「そうか。ゲームも良いが、あまりテンペイジを困らせてやるなよ。あいつの胃に穴が開く」

「了解しました。……先生」

青い瞳がこちらを見下ろす。

「私は 厳然たる弾劾者 の計画は、失敗すると思います」

「何故そう思う」

間髪入れずに質問が返ってきた。彼の表情からは何も読み取れない。まるで自分がこのような質問をすると分かっていたかのように、冷静で冷ややかだ。

「人は愚かであるからです。どれ程こちらが取り締まろうと、網の目をぬって卑しい者は生き残る。初めは成功するように見えるでしょう。しかし時が経つにつれ破綻をきたします。ミイラ取りがミイラになる。」

「……こちらの焦燥などお構いなしに、世界は膨れ上がってゆくんです。今この時にも。たった二人に何が出来ますか？」

「お前の意見は的を射ている」

しかし、と彼は続ける。

「無意味だと傍観者を決め込んで何になる。両手両足があるんなら動くべきだ。劇的に全てが変わる事などあり得ないが、訪れた場所だけは良い方向へ変わるだろう。それは俺が保障する。それにたった二人ではないぞ？ これには多くの人間が携わり、希望を抱いている。元よりこの計画は始動する事に意味があるからな」

「失敗は覚悟の上という事ですか。何という事だ」

「たったの一度でどうにかなるなんて思っちゃいないさ。何度でも立ち上がれば良い。何度でも、訴えていけば良い。思考錯誤を繰り返し僅かでも前進する。その為に賢い奴らがここには集まってるんだろう」

「しかし。……あなた程の人が、城の土台を固めるちっぽけな石垣の一つになるうというのですか？」

「なあアミルヴェラ」

落ち着いたラディスの声音にはっとした。少し感情的になってしまったか。片手で拳を作り口元に当て、咳払いを一つ。

「何です」

「世界を変えられなくても、目の前のたった一人の力になれるなら意味があると思わないか？」

見上げると彼の美しい微笑み。

「シモンに茶でも入れてやれ」

アミルヴェラは目を伏せて笑った。何を焦っているんだろうか、自分は……。

我々が恐れなくてはならないのは、失敗ではなく、諦めだ。

広大な世界を見渡せる視野と、己の足下を見つめる視線。彼の非情な程に冷静な瞳は、どこかで見た事があるような気がする。既に部屋を出てゆこうとしている後ろ姿に声をかける。

「ラデイス先生」

振り返ったラデイスに、笑顔を作って言った。

「あなたの意見は的を射ている」

「リインってすっげー負けず嫌い。勝てるわけないじゃないか」

原っぱの真ん中で、二人して大の字に寝転がっている。リインが楽しそうに笑った。

「イリアス族の『カ』ってすごいんだな」

真つ青な空に白い雲が細長く流れている。今日も嫌味なくらい晴れやかな、良い天気。大きく息を吸い込むと、緑の爽やかな香りが胸を満たす。ロジエルはふと思いついた事を口にした。

「もしかしてさ、俺がロガート族で皆になじめないから相手してくれてたの？」

身体を起こしたリインが不思議そうな顔を向けた。頭に草を乗っけている。

「違うよ。負けたのが悔しかったからどうしても勝ちたかったんだ。

僕が弱くて、そのせいでラデイスが悪く言われるのが嫌なんだ」

答えを聞いてロジエルは呆れた。

何だ……。何て自由な奴らなんだろう。ラデイスもリインも、自分の好き勝手に生きている。周りから伝説とか天才とか、英雄とか言われてるくせに欠片の気負いもない。こんなんで良いのかよ。

なあんだ。

「ロジエルって偉いね」

「はあ？ 何だよ」

「道場に顔を出さないのに毎日通って来てたろ？ お母さんを心配させない為にさ」

ぐつと言葉に詰まった。

「ロジエルは良い奴だもん、大丈夫だよ。きっとすぐ友達も出来る」

「……ふん」

ふいに涙が出そうになり、わざと不機嫌な顔を作って身体を起す。リインが立ち上がって身体についた草を払った。

ロジエルは長すぎる前髪を手で押さえてリインを見上げる。

「あのさ……怖くないの？」

「何が？」

太陽を背にしたリインがきよとんとした表情を向けた。

「その、色々。旅だって危険だろ？ それに戦えば、自分の剣で人を傷つける事になる」

「ああ……」

リインはゆっくりと横を向いて遠くを見つめる。

「怖くないとは言わないよ。でも、大事なのはそこじゃない。僕には護るべきものがある。全力で、自分の全てをかけてそれを護るだけだ。その為の剣だ。」

それに相手を深く傷つけないで済むように、強さが必要なんだから？ 中途半端な強さじゃだめだ」

あらゆる意味での、強さ。それは覚悟というものかも知れない。語るリインの横顔はとても凛々しく、背筋を伸ばして佇む姿が潔くて、ロジエルはリインが女性である事を忘れそうになった。

「……また、会える？」

青い空に栗色の髪がなびく。リインがにまっとした笑顔を作った。

「うん。今度手合わせする時には、絶対僕が勝つよ」

ロジエルも立ち上がり、リインの隣に立つ。

「俺だって、これからどんどん強くなるんだ。負けないかな。あ

……そうか。そういうわけかよ」

「何」

「あんたとラディスって恋人同士なの？」

「……」

リインの白い頬が一気に赤く染まった。それを見て肩を竦めてため息をつく。

「今更照れてもね」

「う、うるさいなっ。行くぞっ」

ずんずんと歩き出したリインの後を歩きながら、思った。

自分にはそういう事は良く分からないし、そんなに良いものだとも思わない。だけど、自分が思っている程悪いものでもないかも知れない。自分もいつか恋をするなら、こんな自分にそんな時が来るなんて今は想像も出来ないけど、それはそれで、もしかしたら楽しいものかも知れない……。

「君達に同行者を一人つける。これはシャウナルーズ様からの提案だ」

大学校の巨大な門扉を背にして立つテンペイジが、視線を手元の資料に落としたまま告げた。既に出立の儀も執り行い、今からいよいよ旅立とうという時だ。隣に立つシャウナルーズは女帝の正装をして、右手にはリリーネ・シルラの第一の使徒のみが手にする事が許される、聖賢の杖を携えている。貴重な鉱物の結晶から出ている白銀の杖の先端には金の輪が七つ。人の得る事の出来る徳の数と人が戒めるべき教訓の数を表している。

「主に我々と君達とを繋ぐ役割を担い動いてもらう」

「この間際にそれを言うとはな。シャウナ、手口が汚いぞ」

ラデイスの言葉に、シャウナルーズが長い指先を口元に当てて笑った。一段下がった石畳の上に佇む彼は左目に眼帯をして黒のマントに身を包み、腕を組んでいる。馬の背に荷を括っていたリインがその隣に立ってラデイスを見上げた。暗い臙脂色のフードの付いたマントがその華奢な身体を覆う。

「どのような危険があるか分からぬ旅だ。そこらの者では対応できぬからな、探すのに手間取ったのだ」

「この者には 厳然たる弾劾者 の資格はない。シャウナルーズ様からのご指示を伝える伝達者だ。しかし腕は確かである。必ず君達の力になるぞ」

ラデイスがまた言葉を紡ぐ前に終わらせてしまわねば面倒だ。シ

ヤウナルーズ様も強引な事をするお人だ。しかしこうでもしないと彼をやり込める事は出来ないだろう。

テンペイジはきりりと痛む胃を無視して淡々と場を仕切った。

「紹介しよう。ガ……」

「ラディースッ！」

テンペイジの言葉を遮り、校舎の奥から大きな声が響いた。大学の磨き上げられた石廊を駆ける足音が近づき、その人物が姿をあらわす。数名の役員が並ぶ間を駆け足で通り過ぎ、その勢いのままぶつかってゆくようにラディースに抱きついた。

「ラディース！ ラディちゃんっ！ 会いたかったわあ。んもう、何年ぶりかしら！？」

長身のラディースと同じ程の背丈。高い位置で束ねられた焦茶の巻き髪が動作に合わせて揺れる。ラディースの首に両手を回し、すらりとした背の高い美女は嬉しそうに身体をくねらせた。ベージュのマントの下は白のブラウスに派手な刺繍の施されたベスト、対の派手なズボン。足元は黒の編上げ靴を履いている。

「いやん！ 相変わらず良い男っ。あらやだ！ どうしたのっ、その眼帯。……素敵！ 最高っ！」

「……お前までシャウナの手先に成り下がったか」

ラディースは相手の勢いに身を引きつつ、呆れ顔で呟く。美女は頼みずりせんばかりに迫り、ラディースが片手でぐいとその顔を押し返した。太く長いまつ毛に茶の瞳。真っ赤な紅を引いた口元は艶やかだ。

「だってさ、シャウナ様の部下になったらラディースと仕事が出る

つていうんだもん。こんな美味しい話ないわよ！」

「……紹介しよう。ガーネット・レイムだ。早馬の名手としてその世界では有名な人物で……ラデイス殿はご存知のようだな」

「しらじらしいぞテンペイジ。昔の友人だ。ミッドラウの次に阿呆な奴だ」

「あん。もつと言って！」

「おい！ いい加減離れるよっ」

それまで呆然と固まっていたリインが我に返って大声を上げた。ラデイスの首に手を回したままのガーネットがリインを見下ろし、それから目と口を大きく開いて人差し指を突き付け、叫んだ。

「こ、これがッ！ あたしのラデイスを奪った奴だつての！？ お、

お、お……男ッ！！」

「違う！」

「子供！？」

「ち、違う！！」

顔を真っ赤にしたリインが噛みつかんばかりに怒鳴り、ガーネットはよろりと後ずさった。突き付けた人差し指がわなわたと震えている。目鼻立ちのはつきりとした美しい顔に、憤怒の表情が浮かんだ。

「こ、こんなガキが、あたしのラディちゃんと……あ、あんな事やこんな事してるってどういうの！？」

ガーネットの叫びにリインは目を見開いて一瞬ひるみ、ますます顔を赤くして叫び返した。

「ああ！ そうだよッ！！」

沈黙。

「いやああー！」

首を激しく左右に振って、両手で自身の腕を抱えガーネットは身もだえた。ラデイスは無表情で大きなため息をつき、リインは赤い顔のまま肩で息をしている。居並ぶ者達からこらえ切れずに笑い声が漏れ始めた。

「ラデイス！ 何だよこいつッ」

「ちよつとラデイス！ こんなチビよりあたしの方がよっぽど良いじゃないのさッ！」

「なっ……！ 何だとっ」

「何さチビ！ やるってんなら相手になるわよ」

リインとガーネットがとてつもない殺気を放って睨み合い、一触即発の状態。テンペイジは無意識に片手を胃の上に添え、隣に立つ女帝に顔を向ける。シャウナルーズはさも可笑しそうに笑って見守っているばかり。ラデイスがそんな女帝に鋭い一瞥を投げて、もう一度大きなため息をこぼした。

「……リイン」

「ラデイスは黙ってる！」

「リイン、落ち着け」

「うるさいなっ」

「こいつは男だ」

「うるさいったら！ ……はっ!？」

リインの小さな身体がまた固まった。がくんと口が開く。

「いやっ！ ラデイス！ あたしは女よ！ 身体はそりゃアレだけど、心は女なのっ」

「悪ふざけはその辺にしておけよ、ベント」

「そんなむさつ苦しい名前で呼ばないで！」

「な、何が、何だか……」

リンの混乱も無理はない。ガーネット・レイム（本名はベント・レイムだが）は世間では長身の美女として通っている。豪華で麗しい目鼻立ち。どう見ても、外見上は女性である。その容姿で漆黒の愛馬を駆る彼（彼女）は、どんな危険な地域からでも生還し、誰よりも早く重要な書簡を通達する 早馬 の名手である。テンペイジは不思議でならない。髭の処理は一体どうやってしているのだろうか。

ひとしきり笑って満足したのか、シャウナルズが杖をどん、と一度大きくついた。金の輪が揺れて涼やかな音が流れ、騒然となった場が引き締まる。

「さあお前達。そこへ並べ。前途の旅路の無事を祈り、我より祝福を授けよう」

ラデイスを挟んでリンとガーネットは無言で睨み合い、横一列に並んだ。

「ラデイス。全てはお主にかかっておる。……頼んだぞ」

「嫌がらせも度がすぎる。これではうまくいくものも難しいだろう」

「ふふ。そう言っな。ベント程の手練れはまずおらぬのだ」

「シャウナ様っ。本名で呼ぶのはやめてちょうだい」

どん、ともう一度杖が揺れ、雅な音が鳴った。

「リリーネ・シルラの使徒たる者達よ、我に続け。唱和せよ。勇敢なる三名の同志がこれより旅立つ」

シャウナルーズの力強い声が響き、重厚な沈黙が周囲を包んだ。

「古よりの聖なる光。授かりし女神、リリーネ・シルラ」

凜と厳かな女帝の声が祈りを紡ぐ。

その両脇にずらりと並んだ枢機議会の面々がそれに声を合わせて続けた。

「かの慈愛の泉より汲みいださんとす」

我らの善と優良なる心を糧とし／その健全なる命を満たし／その永遠なる未来をも照らす／全ては生きとし生けるものの共生と／豊穡なる平和のために／兄弟よかくも歩まん

「使徒、シャウナルーズ・ルメンディアナの名の元に」

この者こそリリーネ・シルラの後継の者ぞ

「ゆけ。我らの兄弟よ。救いの光を信じて待つ健気なる民らの為に。この世界の果てまでも、女神の慈愛を届ける為に」

大聖堂の鐘が、新たな旅の始まりを告げた。

りいん、ごおん、と大地が揺れるような大音響で、大聖堂の鐘が

鳴り響いている。出発を告げる鐘の音。

窓の外に顔を向けていた母が、ふうとため息をついた。

「本当にお見送りに行かなくて良かったの？」

「うん。良いんだ」

「もう、ロジエルったら。どうして今になって急に髪を切りたいたいだなんて」

「母さん、早く」

はいはい、と苦笑しつつ、母が椅子に座るロジエルの黒髪を梳いで、ハサミをあてがった。

ロジエルは真っ直ぐに前を見据え、胸に大きく空気を吸い込む。はらりと切り落とされた髪が落ちてゆく。

良いんだ。答えはもう、俺の中にあるんだから。

ロジエル・コーヴ。

のちにレーヌ女王陛下に仕え 光芒の騎士団 に入団し若くして才能を開花させ、様々な窮地においてその力を発揮してゆく事になる。ロガート族でありながら堅固な忠誠心と偉大な功績を讃えられ、聖なる大騎士の称号を拝受し、後世に語り継がれる英雄として歴史にその名を刻んだ。

しかしそれは幾度となく太陽と月が巡った後の事。
この者達の新たな物語はたった今、幕を開けたばかり。

リリーネ・シルラの祝福があらん事を。

【少年と剣・完】

013 (後書き)

「少年と剣」ご覧いただき、ありがとうございました。

ここに来て、強烈キャラの登場。オカマちゃん。

振り返ってみれば、このお話の主人公はラデイスのような気がします。

お前は熱血教師か！と突っ込んでいただけると嬉しいです（笑）
実を申しまして、この物語、まだ続きます。

しかし再開はずっと先の事になるかと思えます。

二人の第二幕は開けました。今後は旅のお話です。

リインは更なる困難と苦労の渦へ。彼を護る為に、あがきながら成長してゆく事でしょう。

ラデイスの苦悩は深まるばかり。色んな意味で（笑）

そして、ここまでお付き合い下さった方々に、心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

お陰で完結させる事が出来ました。

一人一人に愛を囁きたいくらいです。

あ、気色悪い……。ですよね。

最後にお願ひがあります。一言でも構いませんので、感想をお聞かせ下さい。

では、またお会い出来ますように……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2745/>

少年と剣

2010年11月21日19時54分発行